イスラーム世界研究　第２巻２号（2009 年３月）105-130 頁
Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies, 2-2 (March 2009), pp. 105-130

アラビア語はなぜ語尾変化をするのか
――現代アラブ世界の形成と文法学におけるイウラーブ論争――

竹田　敏之 *

Ⅰ．はじめに

アラビア語を話す人々の領域を「アラブ世界」と呼ぶ場合に、それは千年以上にわたって実在しているという考え方が一般に存在する。しかし、アラビア語が流通しアラビア語を話す人々がいたということと、アラビア語を紐帯とする民族意識が成立するということは全く別のことである。われわれが今日理解しているような「アラブ世界」が実体化したのは、現代アラビア語と共に 19 世紀以降であると考えなければならない。

かつてのオスマン朝下アラブ諸州を中心とするアラブ人の住む地域では、19 世紀以降、多言語社会からなるオスマン帝国の変容と解体の過程で、民族と言語の相関的配置が再編成された。民族語としてのアラビア語とそれを紐帯とするアラブ民族意識が形成される中、「アラブ人とは何か」という問いに対して、「アラビア語話者がアラブ人である」という明確な定義が確立していくことになった。オスマン帝国崩壊の後、アラブ諸国は多くが植民地化され、やがて国民国家として独立していくが、各地域の方言がアラブ諸国の国語の地位を獲得することはなかった。そこには、地域差を超える共通の民族語としてのアラビア語が、憲法や法律により各国の国語や公用語に規定されたという政治社会的背景がある。このアラビア語は、古典文法の原理に基礎を置きつつも統語的に簡略化され、現代的な語彙や表現にも対応しており「現代アラビア語」と呼ばれる。これはアラブ諸国の公用語であり、現代アラブ世界の共通語となっている。

本稿では、この現代アラビア語がいかに成立したかという問題を、現代アラブ世界の形成という観点から考える。そのために、現代アラビア語が成立していく過程で生じた様々な議論の中から、最も重要と思われるイウラーブ論争を取り上げる。

アラビア語は、語尾変化（語末母音の変化）によって文中での名詞類の位置づけが決まる。したがって、この語尾変化に着目することで、語順に依存することなく文を生成することが可能になる。イウラーブ（i‘rāb）と呼ばれるこの文法現象こそ、アラビア語が有する一大特徴［Dévényi 2007: 401; al-Karīm 2004: 76］である。

このイウラーブをめぐる議論（本論では総称としてイウラーブ論と呼ぶ）には、古典文法学においても複雑多様な見解と論争が存在する。ところが、20 世紀に入り文法改革が提唱される中で、特定の古典的理論に対して決定的な批判がなされるようになった。このことはアラビア語がどのような言語であるかをめぐる中心的な課題に関わるため、白熱した議論が展開された。換言すれば、語尾変化がなぜ起こるのかという議論は、アラビア語の最大の特徴の一つを解明することであり、当然ながら現代語が成立する過程で中心的な論点にならざるをえなかったのである。

本論文ではまず、アラブ世界の誕生と現代アラビア語の生成過程を 19 世紀から 20 世紀にかけての社会変容とアラブの民族性に焦点を当てながら考察する。続いてイウラーブ論に関わる古典的理論とそれを批判する現代における文法改革の議論を、この問題が現代アラブ世界の形成にどのよう

*　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

に位置づけられるかという視点から実証的に検討していく。

Ⅱ．19 世紀以降の社会変容と現代アラブ世界の形成

１．イスラーム帝国と普遍語としてのアラビア語

アラビア語には、小杉［2006: 631］がアラビア語の位相として明示しているように、イスラーム世界の普遍語としての側面と、アラビア語話者の民族語としての側面があり、その両者を混同すると論点が曖昧になってしまう。それを念頭において、アラビア語の通時的な展開を考えるならば、政治社会的文脈から大きく以下の４期に分かれる。

第一期は、ジャーヒリーヤ時代と呼ばれるイスラーム成立に先行する時代である。イスラーム成立以前は、言うまでもなく現代的な意味での民族概念はなく、アラビア語はアラブ諸部族の言語として存在していた。そこにはかつて多くの部族方言（lughāt al-qabā’il）があったが、ジャーヒリーヤ時代に詩作活動などによってアラビア半島全体にコイネー（部族間共通語）が成立したとされている。第二期は、イスラームが成立し、聖典の言語としてのアラビア語がイスラームの普遍言語としての地位を獲得する時代である。この時期は同時に、その普遍語としてのアラビア語によってアラブ化が進み、イスラーム以前にはアラブ人でなかった人々がアラブ化し、かつその言語が帝国の行政言語となった時代でもある。おおよそアッバース朝の終わり（1258 年）まで、もしくはマムルーク朝時代を含むことができよう。第三期は、オスマン朝がアラブ諸地域の大半を版図に収め、イスラームの普遍語としての地位は変わらなかったが、帝国の主要な行政語としての地位をアラビア語が失った 16 世紀以降である。そして第四期は、19 世紀以降から現代に至るアラビア語の復興から現代アラビア語が成立していく時代であり、本稿が主として扱う。

さらに第一期から第二期にかけて、すなわちジャーヒリーヤ時代には詩のコイネーとしてアラビア半島の一部で機能していた部族間の共通アラビア語が、イスラーム世界の普遍語にまで発展していく過程には概して３つのポイントがあると考える。第一はクルアーンの結集と第３代カリフ、ウスマーンによる正典化（650 年頃）。第二はウマイヤ朝第５代カリフ、アブドゥルマリクの治世に行われた、アラビア文字による貨幣の鋳造（693 年）［Sawāʿī 1999: 27］と行政語のアラビア語化（700 年）［al-Jahshiyārī 1938: 34］。そして第三は、アッバース朝時代に盛んに行われたギリシア語・シリア語からの翻訳活動とそれに伴うアラビア語の学問語への昇格、である。これらの過程を経て、アラビア語は宗教・行政・文明を担う言語となった。言語の規範化を担うアラブ文法学もまた、イスラーム史のこうした文化的・社会的展開の中で発展を遂げた。

８世紀のバスラの地を発祥とするアラブ古典文法学は、バスラ学派に対抗するクーファ学派（９～ 10 世紀）との論争からアラブ・イスラーム化の拡大とともに、バグダード学派（10 ～ 11 世紀）、エジプト学派（10 ～ 14 世紀）、アンダルス学派（12 ～ 13 世紀）へと大きな拡がりと発展を見せた。文法学は啓典解釈学や読誦学などイスラーム諸学の発展にも大きく貢献し、また形態論やイシュティカーク論（主として語根配列と派生を扱う分野）は、外来語のアラビア語化による語彙の豊饒化にも大きな役割を果たした。かくして古典アラビア語はアッバース朝時代にイスラーム世界のリンガ・フランカへと発展し、文明語としての地位を確立するに至るのである。

この言語変種は一般に「フスハー」と呼ばれる[1)]。このフスハーによる人々への規範力とそれを原動力とする知的生産力、さらにアラビア語話者を取り巻く社会に大きな変化が生じるのは、オス

1）　バダウィー［Badawī 1973］はこのレベルを「遺産的フスハー」（fuṣḥā al-turāth）と呼ぶ。

マン帝国下にアラビア語圏が置かれてからのことである。従って、アラビア語を基軸とする現代アラブ世界の形成を検証するには、この時期の言語状況と社会背景を押さえておく必要がある[2)]。

２．オスマン帝国における多言語社会と言語状況

アラブ地域は、シリアが1516年、翌1517年にはエジプトが、さらに1533年にはアルジェリア、翌1534年にはイラク、そして1551年にはリビアがオスマン帝国の傘下に入った。このオスマン帝国の特徴は宗教の優位性にあり、言語や民族は帝国の構造･統合原理において重要な要素ではなかった。エスニックな要素を持つ多民族の共存と多言語による社会を可能にしたのは、ミッレト制度やズィンマ制度など宗教を軸にする統合原理であった。何語を母語とするか、あるいは何語の話者であるかという言語による民族区分は、帝国にとって、あるいは話者のアイデンティティー形成においても一義的には重要性をもつものではなく、どの宗教に属しているかを第一に問う社会であった。そのことは、婚姻や遺産相続などの民法的規定が宗教ごとに異なっていたことに端的に示されている。言うまでもなく、言語を統合の象徴とする国民国家は存在していなかったし、フランス革命により生まれた「国語」（ラング・ナシオナル）という概念がこの地に届くには、民族主義が覚醒する19世紀後期まで待たなければならない。

支配層の言語であったオスマン・トルコ語（アラビア文字で表記されていた）は、帝国の主たる公用語であり、政治における使用言語として機能していた。しかし、決して独占的な唯一の公用語であったわけではなく、布告や告示はオスマン語を各言語に訳すか、あるいは各地域のことばで直接なされていた。アラビア語は、アラブ地域のみで使われる行政言語で、公用語ではあったものの、使用地域が限定されたいわば二次的な公用語であった。ただし、行政的に民族カテゴリーがあったわけではなく、布告される内容は民族ではなく宗教ごとに異なっていた。すなわち同じアラビア語話者に対しても、宗教によって異なる内容をそれぞれアラビア語で公布するという状況であった。

一方、日常言語として人々が何語を使うかは、帝国の政治支配にとっては大きな意味を持たず、国家が介入する問題ではなかった。実際、19世紀末までは帝国内の特定の言語を唯一の公用語や国語としようとする主張や動きは見られない。多言語社会をトルコ語化させる契機となったのは、「オスマン人」としての民族意識の覚醒であり、言語がトルコ民族形成の重要な要素であり象徴であることを示したのは、ミドハト憲法（1876年）によるオスマン・トルコ語の公用語化の条項（第18条）が嚆矢である。

前述のごとくアラビア語は帝国の一つの公用語ではあったが、アラブ性（ウルーバ）を象徴するような民族語の機能は持っていなかった。さらに帝国下のアラビア語は、支配層と政治の言語であったオスマン語の地位により、かつてのような規範力と活力を失っていた[3)]。アラブ文学史ではこのオスマン時代を「沈滞の時代」「暗黒の時期」などと呼び、規範言語としての古典アラビア語による知的生産力が著しく低下した時期と見なす[4)]。文法学や辞書学の分野でも、学派論争期（９～13世紀）以降の作品の数は非常に限定的であり、ジュルジー・ザイダーンの言葉［Zaydān 1957:

2）アラビア語学の最近の動向［Hagen 2008: 501］として、オスマン帝国下の言語社会やアラブ人の言語観に関する考察の欠如を指摘する声がある。この時期のアラビア語社会に関する先行研究は非常に限定的で、現代のようなアラビア語を中心としたアラブ世界が昔から存在しているかのような議論が多く見られる。これは、オスマン帝国期におけるアラビア語の言語状況に関する資料が極めて限られていることにも起因する。

3）ダマスカス大学の元アラビア語学科教授アフガーニー［Afghānī 1971:14-16］は、「オスマン支配下におけるアラビア語運用能力の低下は目を覆うものがあった」と当時の説教師のラフン（誤用）の横行や一般人のフスハーへの関心の低さを伝えている。

4）この時期をアラビア語の停滞期と見る見方も存在するが、それは言語が有する規範性の大衆への拘束力が低下したという意味であり、アラビア語自体が低迷したことを意味するわけではない。

vol.3, 291］を借りればオスマン帝国時代は「注釈と補注付けの時代」（‘aṣr al-shurūḥ wa al-ḥawāshī）であり、もっぱら先達の文典への注釈付けや要約による伝統墨守が中心であった[5)]。

帝国内の行政言語[6)] としては主にオスマン語が、文芸語としてはペルシア語が広く用いられ、古典アラビア語の使用範囲はイスラームの言語としての宗教的側面に限られていた。一般大衆にとって古典アラビア語すなわちフスハーとは、信仰と宗教儀礼の言語である一方で、ウラマーなどの知識層や一部のエリートのみが運用可能な言語であるとの意識が広がった。規範となる古典アラビア語への一般大衆の関心は著しく低下し、公職につくためのオスマン語教育がアラブ地域で流行り、逆にアラビア語教師の職にトルコ人が就くという事態まで生じた［Afghānī 1971: 23］。アラビア語圏の住民がフスハーを使用する場面は非常に限られ、教育や公の場においてオスマン語や口語アラビア語（アーンミーヤ）の使用が支配的になっていた。

オスマン帝国には、ミドハト憲法上の条項は別として、「国語」や唯一の公用語は存在せず、言語が民族の紐帯となることはなかった。アラビア語について言えば、それはアラブ人にとっての民族語ではなく、イスラームの教養語として機能したため、その運用者は教育を受けることが可能であった特定の知識層に限られていた。このことは結果として、帝国下におけるアラビア語の規範性と一般人の言語運用意識との間に大きな乖離を生むことになった。次節ではアラブ民族主義とナフダ（アラブ文芸復興）の流れを跡付けながら、アラビア語の政治社会的機能の変化と現代アラブ世界の形成過程を考察していく。

３．アラブ民族主義と民族語の形成

19 世紀以降、オスマン帝国領内でも民族主義の時代に入ったが、オスマン朝の支配下にあったバルカン諸国でまずナショナリズムが勃興し（ギリシア、セルビアなど）、トルコ民族主義がそれに続き、アラブの民族覚醒はさらに遅れた。

1860 年代中頃から、帝国治下の諸民族を国民として一体化し国民国家の建設を目指そうとするオスマン主義が生まれ、「オスマン人」という表現が使われ始めた。文学の分野でもオスマン語による小説や戯曲などが執筆され新たな潮流を生んだ。また、オスマン語自体も改革と近代化を迫れられ、簡略化運動［新井 2001: 141,217］が起こり、「自由（hürriyet）」といった新語の普及が進み、西欧の政治思想などを盛り込んだ新聞が盛んに発行された[7)]。

一方、アラブ地域で民族意識にいち早く目覚めた地域は、歴史的シリア（主として今日のシリア、レバノン）であった。キリスト教徒はオスマン帝国の中では、宗教的に言えば被支配宗教（法的に言えば「保護される宗教」）ではなかった。それに対してアラビア語による新たな連帯を説き、言語を軸として再編することは、いわばアラビア語をイスラームの普遍語というムスリムが特権を持つ言語から、宗教横断的な民族語に変えるという意味を持っていた。特に、この地域のキリスト教出身の知識人を中心に展開したナフダ（アラブ文芸復興）は、アラブ民族意識の形成と現代アラビア語の成立に大きく関わる点で非常に重要である。ナフダ運動の中で傑出した推進者として常に名

5）今日、一般に知られているこの時期の著作は、辞書では、『ムヒート』への解釈であるザビーディー著『花嫁の冠』、文法学ではアシュムーニーによる『千行詩』（イブン・マーリク著）への注釈書ぐらいである。『文法学史』を表したタンターウィー［al-Ṭanṭāwī 1995: 301］は、「トルコ支配の時代」の章で、文法学の無味乾燥な複雑化と、文法用語の雑多な使用と混乱の原因は、この時期の文法書の方法論にあると指摘している。

6）当時のエジプトにおける行政言語については［al-Harrāwī 1962: 71-72］に詳しい。

7）しかし、オスマン語そのものが地域全体の共通語や各国の独立後に公用語となることはなかった。トルコ共和国成立後、アタテュルクを中心としたトルコ語純化運動と 1928 年の文字改革は、新生トルコ語をトルコ民族とトルコ国家固有の言語とすることを決定付けた。

前が挙げられるのが、ブトルス・ブスターニーとイブラーヒーム・ヤーズィジーである。

ブトルス・ブスターニーは、まず西欧からの宣教師団との協力のもと、聖書のアラビア語訳に着手した。1863 年には、近代教育の普及と国語（lugha al-waṭan）としてのアラビア語教育を目的に「国民学校」を開設した［Khūrī 1995: 54］。ナフダ運動を先導していく多くの知識人がこの学校で学び、あるいは教鞭を執った経験を持つ。さらにブスターニーは教育用の文法書『ミスバーフ（灯）』[8] や辞典『大言海』（*Muḥīṭ al-Muḥīṭ*）を刊行するなど、アラビア語による宣教とアラビア語教育の推進を図った。特に『大言海』はアルファベット順という新配列によって編纂された辞書で、教育への配慮が伺えるばかりだけでなく、古典様式からの解放を目指した斬新な試みとして評価できる[9]。

他方、イブラーヒーム・ヤーズィジーは、同意語辞典の編纂や「現代と言語」「タアリーブ」などの論考、さらに古典語に基づく新たな語彙や文体を模索し著した『新聞の言語』など、人文学の分野で積極的な執筆活動を行い、アラビア語の規範性の復興に大きく貢献した。さらに一躍ヤーズィジーの名を世に広めたのは、1868 年にベイルートで開催された「シリア学術文化協会」の学会冒頭で朗誦した「アラブよ、立て、そして目覚めよ、膝に至るほどに泥が沖積しているではないか」[10] で始まるナフダ詩であった。このナフダ詩の一節は、アラブの覚醒と連帯を訴える一種のスローガンとして、今日でも広く人口に膾炙している。

彼らは、レバノンにおける 1860 年の宗派対立による内乱を背景に、またオスマン帝国内におけるアラブ・キリスト教徒の地位向上のための一つの秘策として、言語を紐帯とするアラブの共通性を説いた。アラビア語という言語とその文化的遺産に基づくアラブ人意識を覚醒させることで、宗教・宗派を超えたアラブ民族の連帯を強調したのであった。このことは、民族語としてのアラビア語が生起する重要な契機となった。

またナフダを先導したシリア地方の知識人の中には、19 世紀後期にカイロやヨーロッパへと活動の場を移す者も多く、行く先々でさらに文芸雑誌や新聞の刊行を精力的に進めた［Ḥasanayn 1983: 82-84］[11]。彼らは出版・メディアに関わる政治社会・科学技術の語彙や現代的文体の生産にも重要な役割を果たし、現代アラビア語の形成に非常に大きな影響を与えた。

一方、エジプトでは、ボナパルトのエジプト遠征（1798 年）が一般的に大きな衝撃を与えた。これがアラビア語復興と文芸活動の起点となったと考えられる。そしてムハンマド・アリーによる近代化政策は、エジプトにおけるアラビア語の知的活動を一気に促進した。特に、ブーラーク印刷所の造営（1821 年）にともなう古典文献の再生と校訂作業の活性化、アラビア語による『官報』（al-Waqā’i‘ al-Miṣrīya）の発行（1828 年）、そして翻訳活動の奨励が、オスマン帝国下にあったエジプト社会におけるアラビア語の規範性の復興に大きく作用した。

ムハンマド・アリーの教育改革とヨーロッパ留学の恩恵を受けたイスラーム知識人タフターウィーは、エジプト人国民意識の形成ばかりでなくアラビア語の現代化にも非常に大きな功績を残した。従来のタフターウィー研究では、彼の啓蒙思想的側面が対象となることが多く、アラビア語

8）ブスターニーによる文典『ミスバーフ』は、実態は 16 世紀のマロン派司祭ゲルマーヌス・ファルハートの文典への注釈である。ファルハートの文典［Farḥāt 1995］は、古典期の例証を削除し現代的例文やキリスト教色の強い例文の導入を大胆に行っている。

9）『スィハーフ』（*al-Ṣiḥāḥ*）や『花嫁の冠』（*Tāj al-‘Arūs*）など古典の辞書は、語末子音配列方式（例えば、darasa を引く場合は第３語根のスィーンの項を見る）で、脚韻を重視する詩作には便利だが、一般人には難しい。

10）アラビア語の原文は以下の通り。tanabbahū wa istafīqū ayyuhā al-‘arab, fa-qad ṭamā al-khaṭab ḥattā ghāṣat al-rukab.

11）タクラー兄弟『アフラーム』（1875 刊行）、ジュルジー・ザイダーン『ヒラール』（1892）、イブラーヒーム・ヤーズィジー『バヤーン』（1897）『ディヤー』（1898）、ファーリス・ナムル『ムカッタム』（1889）、ヤアクーブ・サルーフ『ムクタタフ』（1885）、シドヤーク『ジャワーイブ』（1860）などが挙げられる。

学における知的活動は注目されなかったが、タフターウィーによる外来の概念・用語のアラビア語化（タアリーブ）や文法改革への貢献は、その後の現代アラビア語の形成を論じる際に非常に重要である。例えば、『書庫の財宝』（*al-Tuḥfa al-Maktabīya*）と題する文法書［al-Ṭahṭāwī: 1851, Zahrān: 1983］は、文典の解説部に図表を取り入れるというアラブ世界ではそれまでにはなかった革新的試みが施されており、文法学史の中でも際立った存在である。この文法書が 19 世紀後期までエジプトの国定教科書として採用されており、エジプトにおける近代教育の展開とアラビア語の普及においても大きな価値を有している。

オスマン帝国下 19 世紀末葉のエジプト社会は、先のシリアのようなアラブ民族覚醒よりは、国民主義的色彩が強かった。その背景には、エジプトでは宗教的マイノリティとしてのキリスト教徒がエジプト固有のコプト教会に属しており、アラブ民族的志向性が弱かったことも考えられる。国民主義はイギリスに対する抵抗運動であったアラービー運動（1881-82 年）が「エジプト人のためのエジプト」を掲げたことによく示されていた。それでもタフターウィーなどの知識人による祖国（ワタン）論や、シリア地方からのナフダ運動の流れ、さらにこの時期に興隆を見せたアブドゥやアフガーニーを中心とする汎イスラーム主義が相まって[12]、アラビア語の活力は復興し、アラビア語を紐帯とする共同体形成への関心が社会的にも非常に高まっていた。

４．オスマン帝国の崩壊と現代アラブ世界の誕生

トルコ民族主義の高揚は、次第にアラブ諸国における民族意識の覚醒を促した。ミドハト憲法で、オスマン・トルコ語の公用語化が明文化されたことは先に述べたが、さらにトルコ人・トルコ語優先主義が推し進められたのは、1908 年の統一進歩団による「青年トルコ人」革命であった。教育現場でのアラビア語使用の制限や、アラビア語教師の冷遇、過度なまでのトルコ語化の推進などが、アラブ人の反発を招いた［al-Afghānī 1971: 93-94］。この時期には、アラビア語圏でも自治の要求やアラビア語公用語化の声が高まり、政治・文化活動の拠点として多くの秘密結社や協会が相次いで設立された。

例えば、1912 年に設立したベイルート改革協会は、アラブ州におけるアラビア語の公用語化（綱領第 14 条）［al-Dūrī 2005: 513; 木村 1987: 203］を積極的に要求した。カフターン協会（1915 年設立）もまた、国会と地方政府をもつアラブ国家の建設、そして、アラビア語の公用語化を訴えた［al-Dūrī 2005: 513］。また、1913 年にパリで開催された「第一回アラブ大会」では、各アラブ諸国や協会からの代表 24 名により、アラビア語をオスマン帝国議会での使用言語とすること、アラビア語をアラブ地域のアラブ州の公用語とすることが決議された。この会議の代表の一人であったアブドゥルガニー・ウライスィー（1891-1916）は、「アラブは唯一の言語・人種・歴史・習慣・政策目標のもとに団結するべし」［Suleiman 2003: 92-93; al-Dūrī 2005: 514］と、アラブの民族性に基づくウンマ（共同体）形成の重要性を論じた。

公用語化という政治的要求、すなわち「言語の政治化」は、第一次世界大戦の終焉（1918 年）後、アラブ諸国が独立していく過程で、各国の憲法によってアラビア語が公用語や国語に規定されることに繋がった［資料１］。民族意識の更なる高揚にともない、例えば 1948 年に設立されたバアス党の党綱領では、アラビア語とアラブ人に関する条項が設けられ、「教育と読み書き言語として認め

12）イスラーム知識人たちは、イスラームの普遍語としてのアラビア語の復興とそれによるウンマの構築を説いた。アブドゥは、19 世紀末のエジプトの言語社会を「アラビア語は至る所で死に瀕している、しかしダールルウルームでは生き続ける」（inna al-lugha al-ʻarabīya tamūt fī kull makān wa taḥyā fī dār al-ʻulūm）という表現で語った。この言葉は現在でもダールルウルーム学部のスローガンとなっており、同学部の入り口に掲げられている。

られる国家の公用語と国民の言語はアラビア語である」(一般諸規則第８条)［al-Ḥuṣrī 1985: 122］、「アラブ人とは、その者の言語がアラビア語であり、アラブの地に住む者、あるいはその地での生活を希求する者、そしてアラブのウンマに帰することを願う者である」（一般諸規則第９条）［al-Ḥuṣrī 1985: 122］と明文化された。

さらに 1945 年のアラブ連盟設立は、アラビア語を紐帯とする現代アラブ世界の形成に決定的な意味を持った。2008 年現在、加盟国 22 カ国（パレスチナを含む）はすべて、憲法や法律でアラビア語を公用語もしくは国語と定めている国である［資料１］。それは、アラビア語を公用語とする国がアラブの国であり、そこに住むものはみなアラブ人であるという自明視された定義に立脚している。この定義を明確に提示した人物がサーティウ･フスリー（1883-1967）である。フスリーは「アラブの国々に帰属し、アラビア語を話す者はアラブ人である」［小杉 2006: 743］という定義を打ち出し、アラブ民族＝アラビア語話者というテーゼを成立させた。さらに「ウルーバ（アラブ性）とは、アラビア半島の者に特別ではなく、またムスリムだけに特別なものでもない。アラビア語で話し､アラブの国々に帰属するすべての者を包摂する」［al-Ḥuṣrī 1985: 517; Suleiman 2003: 133］という、アラビア語をメルクマールとしたアラブ民族主議論を確立した。アラブ連盟設立のこの時期に、アラブ意識が確立され、それによりほぼ民族語としてのアラビア語も成立していったと考えられる。

こうして 19 世紀からオスマン帝国崩壊後の 20 世紀中葉にかけて、アラビア語はイスラームの普遍語として保持される一方、政治社会的展開の中で各国の公用語や国語の地位を獲得し、さらにアラブ人とは何かを規定する民族語として成立していく。その過程は同時に、言語を紐帯とするアラブ民族意識を形成することでもあり、現代アラブ世界の誕生に帰結していく。

以上をまとめると、アラブ民族意識の形成と民族語としてのアラビア語が成立していく過程は、（１）オスマン帝国の崩壊から植民地化と民族意識の更なる高揚期、（２）アラブ人とは何かが明確に規定されていくアラブ連盟設立期、そして（３）その後の急進的民族意識の高揚期とエジプトがアラブ世界における主導権を握っていく時期、さらに（４）67 年戦争と 71 年の湾岸諸国の独立により、民族主義や部族的紐帯を越えたアラブ連帯の融和期、の四期に分けることができる。概して本稿で扱うイウラーブ論争とは、おおよそこれらの時期に連続して展開されたいくつかの議論を指すものである。それでは、まずイウラーブとは何かに関する古典期の議論を概観しつつ、現代の論争を検証するための基礎的考察を行う。

Ⅲ．古典文法におけるイウラーブ

１．イウラーブとは何か

イウラーブは、アラビア語における最も重要な形態統語論的（morphosyntactic）特性［Suleiman 1999: 121］と言われている。一般に、この現象は、名詞の「格」（case）や動詞の「法」（mood）を示す語尾変化［Levin 1995: 214］と理解されている。イウラーブ（iʻrāb）という名で知られるこの現象は、複雑かつ精緻な規則を伴っており、その習得は外国人学習者にとってのみならず、アラビア語を母語とする者にとっても必ずしも容易ではない。イウラーブの機能は、格という文法範疇に限って言えば、ラテン語や、サンスクリット語を始め古典語を含めた印欧諸語に通ずる部分がないではない。アラビア語も屈折語であり、格を語の屈折による語形変化によって表すが、アラビア語では語末母音の動き（ḥarakāt al-iʻrāb）こそが、文中における単語の相関関係を示す点で特徴的である。一方、日本語では、格は「が・を・に」などの「てにをは」の膠着現象で示され、名詞の語

尾変化による格標識はない。格が時代とともに衰微していった英語やフランス語は、語順の固定によって、文中における単語の位置が格機能を担うようになった。

アラビア語においては、文中における単語の文法的・意味的機能は、語順よりも語末母音の変化によって判別されることが多く、語尾変化を理解することは統語関係の解釈においても決定的に重要である[13)]。このイウラーブとそれに付随する文法理論は文法学初期より常に文法家たちの議論の中心的な問題の一つとなってきた。まず、古典文法学におけるイウラーブ論を概観することから始めたい。

２．語末母音と語法違反

７世紀中葉にイスラームが確立し、いわゆる大征服にともなって、アラブ人がアラビア半島の外側に大量に移民し、非アラブ人と交流するようになった。しかも、アラビア語が支配者の優勢言語であったため、住民のアラブ化が生じた。アラビア語を母語としない人々との接触は、アラブ人の言語使用に大きな影響を与えた。結果として「ラフン（laḥn）」[14)] と呼ばれる語法違反が広がったことは、それに随伴するアラビア語文法の規範化を急務の課題とした。普遍語としてのイスラームのアラビア語がそもそもこの問題を生み出したと言える。

ラフンの蔓延はアラビア語にとって、そして何よりもクルアーンのアラビア語を「神の啓示」とするイスラームにとって大きな問題であった。最も懸念された語法違反は、クルアーンのテクストにおける母音の読み間違えである。特に、語末母音における語法違反は、解釈における致命的な対立が生まれる。

例えば、inna-mā yakhshā Allāh-a min ‘ibādi-hi al-‘ulamā’-u.「神のしもべの中で知識ある者こそが、かれを畏れる。」（Q 35: 28）の２個所の語末母音を逆に Allāh-u / al-‘ulamā’-a で読むと、動作主は「神」、目的語は「知識ある者」となり、神が人間を畏れていることになる[15)]。語末母音のわずかな相違が、文の意味に大きく影響する。このような事例は、文法学史を扱う書のなかで数多く登場する。初期文法学では、こうしたクルアーンのテクストの語末母音に関する解釈と体系的記述が研究対象の一つであった。

また人々の会話における語法違反に関する伝承も多く存在する。よく知られたものに、アブー・アスワド（Abū al-Aswad al-Du’alī, 69/688 年没）[16)] にまつわる伝承がある。娘が彼に、mā ashadd-u al-ḥarr-i.「熱さの中で最も激しいものは何か」の意味の文で聞いたので、al-qayẓ-u.「盛夏の暑さだ」と返答した。しかし、娘の意図は感嘆文（その場合、ashadd-a al-ḥarr-a という語末母音にしなければいけない）であった。彼は、娘の当惑した姿を見て、mā ashadd-a al-ḥarr-a.「なんて暑いのでしょう」と言いなさい、と教え正した［al-Zubaydī 1984: 21］。語末母音を間違えたことで、比較級を含む疑問文に解されてしまったという一例である[17)]。

13）その重要性は、啓典解釈学（タフスィール）におけるイウラーブを冠する著作の多さからも伺える。啓典解釈学の中心はこの語尾変化をめぐる議論でもある。

14）文法的、語用論的な違反のことを指す。何が違反かは文法学の体系化によって決定された。記述文法の観点から言えば常用の言語現象に過ぎないが、一般大衆に流布した誤用を laḥn al-‘āmma と呼ぶ。 読誦学でも laḥn の用語を使うが、読誦学には常用がないため、その定義や位置付けは異なる。

15）ハラビーのイウラーブ解説［al-Ḥalabī 1986: vol.9, 232］によればウマル・ブン・アブドルアズィーズ、アブー・ハニーファの読誦法では、Allāh-u / al-‘ulamā’-a で読む。その場合、yakhshā は「敬意」の意で、al-‘ulamā’ の対格の根拠を「学者に対する敬意」とし矛盾はないとされる。

16）アブー・アスワドに関しては［池田 1968; Goldziher 1994: 3-4; Nāṣif 1968］を参照。

17）同様の逸話は、アッバース朝期の文豪ジャーヒズの『修辞明議の書』（*al-bayān wa al-tabyīn*）や、ヤークートの『文学者大全』（*Mu‘jam al-Udabā’*）に数多く収録されている。

この種の伝承の存在は、誤用や語法違反の広がりを伝える資料となるばかりでなく、あるべき正しい語末母音、すなわちイウラーブを付けて発話することが当時のアラブ人にとっても、困難であったことを伝えるものである。事実、語末母音までを正確に誦むことの高徳を説くハディースも存在する[18]。しかし一方で、ラフンに関する伝承が多数存在している事実は、ラフンの存在によって措定される形で、当時のアラビア語にイウラーブが存在していたことを明示するものである。

今日、語末の母音変化と解されるイウラーブの概念は、文法学の初期段階からどのように議論されてきたのか、次節では、古典期におけるイウラーブ論について、古典文法の資料を素材に検討していく。

3．イウラーブの定義

イウラーブとは、「awḍaḥa と同義の a‘raba ‘an（～を明らかにする）の動名詞で、必要とされる意味を明らかにすること」［al-Tahānawī 1996: vol.1, 233］である。より語根に忠実な、字義的な意味は「アラブ化すること」[19] である。古典文法では、一般にイウラーブを「言葉上の、または推量的なアーミル（‘āmil）の違いによる語末母音の差異」と定義する［Ibn al-Ḥājib 1997: vol.1, 237,242; Versteegh 1997: 75］。

アーミルとは「語末母音の変化に影響を与える作用」のことである［Levin 1995: 218］。初期の文法家たちは、一切の現象の生起は必ず原因があってのこととする因果律の考えを文法学に応用し、語末の母音変化に関する因果関係を理論化しようとした。そこでは、「因」にあたるものが作用語（‘āmil）であり[20]、被作用語（ma‘mūl）の語末母音の変化であるイウラーブが「果」となる。古典文法では、このアーミルとイウラーブの関係を明らかにし、解釈することに重点が置かれた[21]。特にバスラ学派は、このアーミル論に固執する傾向が極めて強かった。

例えば、muḥammad-un qā’im-un.「ムハンマドは立っている」という名詞文の主語（mubtada’）である muḥammad の主格語尾（-un）に対するアーミル（作用語）について、「被作用語は作用語に先行することはない」というアーミル論の原則に基づき、語としては存在しない ibtidā’ と呼ばれる抽象的なアーミルを文の前に想定することで辻褄を合わせようとした。同様の想定に依拠した解釈は、muḥammad-an ra’aytu-hu.「私はムハンマドを目にした」という一見、目的語＋動作主という倒置文とも見られる文にも応用された。この文について古典文法では、文の前に muḥammad の対格語尾（-an）を生起させるアーミルとして対格化作用を有する動詞 ra’aytu を想定し、ra’aytu muḥammad-an ra’aytu-hu. と解釈することで、アーミル論の原則を貫きつつも対格語尾が生起する原因を説明しようとした[22]。

18）「イウラーブをつけてクルアーンを読んだ者には殉教者の報酬がある」［Kahle 1949: 68］。「クルアーンをイウラーブなしで読んだ者には一人の天使がやって来て、各文字につき 10 の善行を、一部にイウラーブをつけて読んだ者には 2 人の天使がやって来て、各文字につき 20 の報酬を、全部につけて読んだ者には 4 人の天使がやって来て、各文字につき 70 の報酬を書き留めてくれる。」（［al-Ṣāliḥ 1970: 128-129; Kahle1949: 68］はこれと同様のハディースを 7 つ引用している。）

19）反意語はイウジャーム（i‘jām）「非アラブ化すること」で、テクストに母音符号を付すことを意味する。その受動分詞（mu‘jam）は「辞典」を意味する。

20）「作用語」「被作用語」に関しては、池田［池田 1973］の訳語に従った。また本論でも、池田に倣い、作用語、被作用語をめぐる一連の議論を「アーミル論」と呼ぶことにする。

21）クルアーンの啓典解釈には言語的解釈を中心に編まれたものが多く存在するが、展開される解釈の中心はこのアーミル論に基づくイウラーブの説明である。

22）この文法現象は「イシュティガール（先占）」（ishtighāl）と呼ばれている。古典文法では muḥammad を主格にし、muḥammad-un ra’aytu-hu とすることも許容されているが、その場合アーミルをめぐる解釈は異なる。すなわち、muḥammad の主格語尾（-un）を生起させるアーミルは、名詞文の主語のアーミルとして想定される ibtidā’ となり、ra’aytu-hu はそれだけで動詞文を構成する。その動詞文の主語は、動詞 ra’ā が接続する一人称単数代名詞 -tu である。

一方、「果」としてのイウラーブに関して古典文法では、２つの学派に分かれる。一つは、イウラーブを、顕示的なもの（lafẓī）とする派である。ハリール・ブン・アフマド（170/786年没）や、スィーバワイヒ（188/803年没）、そしてその弟子のクトゥルブ（207/822年没）が属するとされるこの学派［Qabāwa 2003: 40-41］は、アーミルの作用の結果である３つの母音、スクーン、その代用的なもの[23]、すなわち -u /-i /-a / ø という語末音をイウラーブと見なす［al-Sayyid 1982: 42］。

もう一方は、イウラーブを内在的で含意されているもの（ma‘nawī）とする派である。この学派には、イブン・サッラージュ（316/928年没）、ファーリスィー（377/987年没）、ザマフシャリー（538/1144年没）など比較的後期の文法家が属している［Qabāwa 2003: 40-41］。彼らは、イウラーブを「アーミルの差異によって語末母音の変化が生じること」と定義し、結果として生起する変化自体をイウラーブと呼ぶ。従って３つの母音、スクーン、その代用的なものは、イウラーブを示すもの（dalīl）と位置づけられる［al-Sayyid 1982: 42］[24]。イウラーブを語末母音と捉えるか、変化そのものと捉えるかで違いはあるものの、２学派に共通することは、イウラーブがアーミルによってもたらされた結果であるとみなす点である。

イウラーブを顕示的とする文法家の中でも、クトゥルブの主張は特異である。彼は、語末母音の変化をさらに現実的な音韻現象と捉えた。クトゥルブによるイウラーブを論じた著作は現存しないが[25]、バグダード学派に属する10世紀の文法家ザッジャージー（al-Zajjājī, 337/949年没）の『文法の諸原因の解明』（*al-Īḍāḥ fī ‘Ilal al-Naḥw*）において、クトゥルブの以下の見解を見ることができる。「休止（waqf）における名詞は、語末をスクーン停止とする。アラブ遊牧民は、スクーン連続の場合でさえ、緩慢さを持たせ発話することで、休止の場合と同様、連結（waṣl）におけるスクーン停止をすることがあった。一方で、連結に際して、発話の均衡を整えるために母音を挿入することもあり、その場合に、語末の母音変化が生起するのである」［al-Zajjājī 1996: 70-71; Versteegh 1995: 102］。これによれば、語末母音の変化は、語と語の繋がりとしての音の均衡を保つための追加的要素であり、文の意味に何ら影響を与えるものではない。ダイフ［Ḍayf 1968: 109］によれば、古典文法において、このような主張をした文法家はクトゥルブただ一人である。アーミルに関する直接的な言及は見られないものの、クトゥルブの見解は、アーミルの作用とは無関係のものであり、その独自性からもイウラーブをめぐる第三の見解とみなすのが適当であると考える。無論、アーミルとイウラーブの結び付きを絶対視する古典文法において、クトゥルブの語末母音に関する見解は文法学の主流となることはなかった。

古典期における文法家の大半は、アーミルこそが語末母音を決定する要素であり、その結果としての語末母音の変化、すなわちイウラーブを論じることこそが文法学であるとした。ザッジャージーによる、「文法学（‘ilm al-naḥw）はイウラーブであり、イウラーブは文法学である」［al-Zajjājī 1996: 91; Versteegh 1995: 152］という言葉は、いかに文法学がイウラーブに固執した学問であるかを示すものである。

イウラーブに固執することで文法学は、いわばアーミルの作用の結果である語末母音の変化とそ

さらにその動詞文は名詞文の主語である muḥammad-un の述語となり、主格の位置（maḥall）に置かれていると解釈される。イシュティガールをめぐる議論に関して詳しくは、［Ḍayf 1986: 115-117］を参照。

23）例えば、fī miṣr-a「エジプトにおいて」など、二段変化名詞の属格語尾（-a）は根幹としての属格語末母音（-i）の代用である。また、ra’aytu al-ṭālibāt-i「私はその女子学生たちに会った」など、女性規則複数名詞の対格語尾（-i）は根幹としての対格語末母音（-a）の代用である。

24）qādin「裁判官」や hudan「導き」など、イウラーブを示す語末母音が必ずしも顕在しない語に対しては、推量によってその語末母音を特定する。

25）20以上に及ぶ著作のうち、現存するものは *Kitāb al-Aḍdād*, *Kitāb al-Farq*, *Kitāb al-Azmina*, *Kitāb al-Muthallath* の４書のみである［Versteegh 1983: 405］。

の原因のみを詮索する学問となった。11 世紀の文法家ジュルジャーニー（‘Abd al-Qāhir al-Jurjānī, 471/1078 年没）による『100 のアーミル』（*al-‘Awāmil al-Mi’a*）はそのタイトルのとおり、徹底的に作用語の観点から文法規則を説明したものである[26]。文を理解するために重要な、ことばの構成（tarkīb）と配列（tartīb）は文法学から離れ、意味論（‘ilm al-ma‘ānī）の分野に組み込まれていった［al-Jawārī 1984: 32; Shurrāb 1990: 16-17］。

アーミルとイウラーブを中心とした議論と解釈が文法学を無味簡素なものにし、複雑化と文法学の低迷を招いた一要因であるという批判が公に聞かれるようになるのは、20 世紀に入ってからのことである。

Ⅳ．文法改革とイウラーブ論

1．イウラーブ批判とイウラーブ廃止論

エジプトでは 20 世紀に入ると教育の近代化とともに、アラビア語に関する議論が本格化し始めた。それまで伝統墨守一色であった文法教育をいかに改善するべきか、その議論の背景には、生徒が古典の難しさに困難を覚えるのみならず、教師を含めて教育現場からの文法学に対する不満の声と、エジプト人としての国語意識の覚醒があった。現代的なエジプトの形成の中で「国語」としてのアラビア語をどのように普及するのかということは急速に問題になりつつあった。それまで、アラビア語学、中でも特に文法学は、アフマド・アミーン［Amīn 1976: 62］の言語的保守派勢力に対する次の表現にあるように、「文法学に手を加えることは、ハラーム（宗教上の禁止）同然」と見なされる時代が続いていた。その伝統に、大胆にも風穴を開ける人物が 1937 年に一冊の著書とともに登場する。イブラーヒーム・ムスタファー（Ibrāhīm Muṣṭafā）である。アズハルの伝統教育を受けて育ったムスタファーは『文法学の復活』（*Iḥyā’ al-Naḥw*）の中で、伝統文法の中心をなすアーミル論と、それに伴うイウラーブの解釈を痛烈に批判した。ムスタファーの批判は、古典文法学でも特に、推定によるアーミルの設定に固執したバスラ学派的理論に向けられた。現代アラブにおける初の学術的かつ包括的な文法批判書［‘Abd al-‘Azīz 1985: 215］と評される『文法学の復活』は、その後の文法改革にも大きな影響を与えた[27]。

1938 年には、文部省による文法・修辞学に関する簡略化委員会が設置され、新たな文法学の整備と、それに基づく国定教科書の編纂に向けた議論が行われた。結果として、同委員会は一つの文法改革試案をアフラーム紙（1938 年 6 月 25、26 日付）に発表した。1945 年には、カイロアラビア語アカデミーが、先の文部省提案に関する協議会を開催し、メンバーや外部からの有識者によって文法規則の細部に及ぶ議論が交わされた[28]。さらに、1952 年の革命以降、ナセルが主導したアラブ民族主義の高揚期には、エジプトにおける文法改革の余波は、イラク、シリア、レバノンまで広がりを見せた。ムスタファーに代表される古典文法理論への批判は、多くの学者や知識人によって、アラビア語文法をめぐる様々な議論へと展開した。

20 世紀の文法改革における中心的なテーマとなったのが、語末の母音変化をどのように扱うか、

26）ジュルジャーニーは 100 の「諸作用」（‘awāmil）をまず、60 の作用語、30 の被作用語、10 の作用に分け、さらに作用語を、56 の語彙的（lafẓī）な作用語と 4 の慣例的な（samā‘ī）作用語に分類した。語彙的な作用語の下位には、類推的な（qiyāsī）作用語が 9、抽象的な（ma‘nawī）作用語が 3 存在する。ザフラーンによる校訂本［al-Jurjānī 2005］を参考にした。

27）ムスタファーと文部省による文法改革については［竹田 2006］で詳しく論じた。

28）協議会の結果は、文法簡略化に関するアカデミー決議案として同機関誌［MFAL 1951: 193-197］に発表された。

すなわちイウラーブ論であった。文法学が困難とされるのは、語末母音をめぐる解釈と、それに固執した文法教育に原因があると考えられた。改革論者の中には、イウラーブこそがアラビア語を複雑にさせた主要因として、イウラーブの廃止を提唱する者もいた。

ターハー・フサイン（Ṭāhā Ḥusayn）は、「イウラーブの問題」（Mushkila al-I‘rāb）と題される講演で[29]、自らのアズハルでの文法学習を回想し「イウラーブという言葉は、実に恐怖感を与える言葉だ。･･･ 初めの授業は必ず『バスマラ［クルアーン冒頭の節］のイウラーブは９あり、そのうち７つは許容されるものであり ･･･』で始まった。･･････ 文法学の独占者、すなわちアラビア語の独占者たちは、文法改革はクルアーンを腐敗させるもの（ifsād）であると考え、文法学に害を及ぼす者はクルアーンを害したのと同じであるという考えが固定化した」［Ḥusayn 1959: 89,98］と、文法学に対する保守派勢力を牽制した。この言葉は、まさに文法改革派の立場を代弁したものである。そして、現代の知性に複雑な文法学は適合しないとし、イウラーブの解釈に終始することのない文法簡略化の必要性を強調した。

アミーン・フーリー（Amīn al-Khūlī）は、カイロ大学文学部での講義[30] を『これが文法学か？』［al-Khūlī: 1944］にまとめ、５つの名詞群、語末欠陥名詞、複数形、双数形など、イウラーブの解釈が複雑とされる事項について新たな解釈を提唱した。また、口語であるアーンミーヤの標準語化を目指した論客の代表であるサラーマ・ムーサー（Salāma Mūsā）[31] は、著作『現代修辞学とアラビア語』［Mūsā: 1945］の中で、文法学の複雑化の要因をめぐる議論と、イウラーブの排除を提唱した。

このような動きに呼応する主張はレバノンでも登場した。言語学者のアニース・フライハ（Anīs Furayḥa）[32] は、著作『簡略化アラビア語文法』で、「イウラーブは現代文明には適するものではない……イウラーブは価値のない単なる装飾に過ぎず、人間同士の相互理解において何ら価値はない。……もし、人間の営みにイウラーブが不可欠であるなら、日常生活にこそ残っていているはずだ。」［Furayḥa 1955: 123,124,184］とし、イウラーブの排除を積極的に推し進めた[33]。

文法改革は、イウラーブに対する批判を明るみに出し、新たな提唱を呼ぶことで、イウラーブをめぐる議論を活発化させた。それは同時に、学校教育の現場と、その学校教育の拡大によって増大した学習者からのイウラーブへの不満と、簡略な文法学を求めるニーズを反映するものであった。

概して言えばイウラーブ論は、イウラーブそのものの再定義と文法学の中での新たな位置づけを論じる改革論と、イウラーブに伴う語末母音の変化を排除しようという提案、すなわち、語末をすべてスクーン停止（語末母音を一切発音しない）するという廃止論という２つのテーマを中心に展開した。次節では、この二つの考え方の代表的論者をそれぞれ取り上げる。すなわちイウラーブとイウラーブを生起させるアーミルの結び付きへの批判によって文法学の再構築を目指したムスタファーと、語末母音の変化は音韻配列による都合上の現象という見解に基づき、イウラーブの排除を正当化しようと試みたイブラーヒーム・アニース（Ibrāhīm Anīs）である。両者とも、イウラーブ論を始め、アラビア語改革を論じる際には重要な人物であり、アラブ世界におけるアラビア語論に関連する論考では、必ずといっていいほど名前の挙がる論客である。

29）フサインに講演を依頼し、またタイトルを設定したのは、他でもないムスタファーであった［Ḥusayn 1959: 89］。

30）1943 年４月８日に行われたこの講義は、翌年のカイロ大学文学部紀要第７号に掲載された。筆者が参照したのはその抜粋版（カイロアメリカ大学所蔵）。

31）サラーマ・ムーサについては、［Bārk 2007; 勝沼 2006］を参照のこと。

32）アニースのアラビア語論を論じたものに［新妻 1990］がある。

33）他にも、ムハンマド・タイムール［Taymūr 1956］、アフマド・アミーン［al-Danāṣūrī 1986; Mazīd 1973 参照］、カースィム･アミーン［Sa‘īd 1985: 90 参照］など 20 世紀を代表する知識人は、挙ってイウラーブの諸問題を取り上げ、自らの著書の中で論じている。

２．ムスタファーのイウラーブ論

ムスタファーは1958年、アラビア語アカデミー機関誌に「イウラーブの諸学派」(Madhāhib al-I‘rāb) と題する論文を発表した。

「イウラーブはアラビア語を支配しており……今もって学習者の恐れの対象であり、舌と筆の滑りやすい場所である」で始まる論文でムスタファーは、古典文法の支配下において、文法学が、語末の母音変化を明確にすることを専門としていることを批判し、文法教育におけるイウラーブの在り方を論じた［Muṣṭafā 1958: 51-54］。

この論文は、1937 年に刊行された『文法学の復活』で展開された伝統文法批判を基調としている。ムスタファーは著書の中で、文法学の停滞は、アーミルとその作用の結果であるイウラーブの解釈に固執したことに起因するとして、古典文法理論を批判した。

古典文法では、イウラーブの標識である語末のダンマ（-u）、カスラ（-i）、ファトハ（-a）は、アーミル（作用語）がもたらす作用の結果とされた。それは、イウラーブの古典的定義「イウラーブは、明示された語彙的なアーミルと、推定される抽象的なアーミルによる語末母音の変化」［al-Jurjānī 1987: 53］にも明確に示されている。前章で論じたように、推定によるアーミルの議論が古典文法学を極めて複雑にした。ムスタファーによれば、文法学に必要なことは、文の構成における単語の繋がりと、語と意味の関係を理解することである［Muṣṭafā 1937: 3］。そして、アーミル論を文法学から排除し、イウラーブと意味との関係を再構築すべく、意味の観点からイウラーブの再定義を試みた。

ムスタファーの再定義は、「ダンマは、文において他の語がその語に依存していること（isnād）を示す標識であり、カスラはその前にある語への付随（iḍāfa）を示す標識」［Muṣṭafā 1937: 50］とするものであった。そして、ファトハについては、「アラブ遊牧民が好んで語末の発音に用いていた軽い母音（al-ḥaraka al-khafīfa al-mustaḥabba）で、現在の口語における語末のスクーン停止に相当する」とし、イウラーブの標識から排除した［Muṣṭafā 1937: 78］。すなわち、ムスタファーによる新たなイウラーブの枠組みは、ダンマとカスラからなるものである。

ファトハを排除するという前例のない提案は、その後の文法改革で支持はされなかったものの、ムスタファーのイウラーブの新構想は、アーミル論を中心に編まれていたそれまでの文法書の構成に大きな影響を与えた。古典文法理論に沿って編まれた伝統的な文法教科書では、語末母音が変化するか否か（不変化の状態にはスクーンも含まれる）という格変化・格不変化（al-i‘rāb wa al-binā’）を大きな柱とし、イウラーブの下位範疇に、主格にされたもの（marfū‘āt）、対格にされたもの（manṣūbāt）、属格にされたもの（majrūrāt）を置き、その中で文法事項を扱うという構成が基本であった。［図１］

［図１］

伝統的な文法教科書の枠組み（『アージュッルーミーヤ』（*al-Ājurrūmīya*）など）

品詞（aqsām al-kalām）

↓

格変化・格不変化（al-i‘rāb wa al-binā’）

↓

u 音にされたもの　（marfū‘āt）

a 音にされたもの　（manṣūbāt）

i 音にされたもの　（makhfūḍāt ／ majrūrāt）

語末母音が「～されたもの」という受動分詞形になっているのは、言うまでもなくアーミルによる作用の結果を反映した表現である。

ムスタファー自ら中心的に編集に携わった『文法学の解放』（*Taḥrīr al-Naḥw*、1958年刊行）というアラビア語アカデミーが公認した文法指導要領では[34]、アーミルに関する記述は一切なく、アーミル論に基づくイウラーブ解釈は完全に姿を消している。文法書の枠組みも、語論（aḥkām al-kalima）から文論（aḥkām al-jumla）そして構文論（uslūb）へと、小さい単位から大きな単位へ展開していく構成である。また、従来「a音にされたもの」の範疇で細分化され扱われていたmafʻūlāt[35]は、「補完要素」（takmila）という用語で統括されている。同書では、語末標識としてのファトハは存在しており、イブラーヒームが提唱したイウラーブからのファトハ削除は実現されてはいない。しかし、「補完要素」の設定によって文法事項を簡素化したことは、アーミル論からの脱却を目指したムスタファーによる文法改革の成果の一端と言える。

それでも、イウラーブの解析練習は『文法学の解放』の中でも依然として多く存在し、ムスタファーは、今もなおイウラーブが文法学の中心となっている事実を認めざるを得なかった。その憤懣が、同年に発表された論文『イウラーブの諸学派』の中で率直に表明されたと言えよう。ムスタファーが目指した文法学とは、解釈文法ではなく表現文法であった。いかに正しい文法に基づき豊かな文章を作れるか、その力を養うことこそ文法学の真の目的と考えたのであった。

３．イブラーヒーム・アニースのイウラーブ論

イウラーブ論の新たな展開として注目されるのが、イウラーブの完全な排除とスクーンによる語末停止の正当性を唱えた、当時ダールルウルーム学部言語学科教授のイブラーヒーム・アニースであった。アニースは1950年、『言語の秘要の一部』（*Min Asrār al-Lugha*）を著し、「イウラーブの物語」（Qiṣṣa al-Iʻrāb）と題された章で、語末停止の正当性を論じた[36]。アニースの見解は、文法学者をはじめ多くの知識人から注目された[37]。それを受けて、カイロアラビア語アカデミー第20回総会（1954年）の第８分科会で、「母音によるイウラーブに関する一考察」と題した発表を行った。

アニースの論点は、語末のスクーン停止の正当性を論証することにあった。それをもって、文法学におけるイウラーブの本来の意義を裏づけ、新たな理論によって語末の母音変化を解明しようと試みるものであった。

まずアニースが注目したのは、クルアーンの読誦法に見られる語末の母音変化であった。開扉章のal-ḥamd-u li-llāh-iの句は、流派によってはal-ḥamd-i li-llāh-iとも読まれる［Ibn Jinnī 1998: vol.1, 110］。その根拠は何か。この点にアニースは着目した。すなわち、後者の語末母音-iは、属格の標識ではなく、前者が主格であるごとくイウラーブの観点からは説明ができない。啓典解釈学や読誦学では語末母音の-iを、後続するlāmの母音iへの追従と説明する［Anīs 1958: 55］。同様に、al-ḥamd-u lu-llāhiという読誦法における、前置詞li-の変則読みluについても、前に位置する単語al-ḥamd-uの語末母音uによる影響と解釈される［Ibn Jinnī 1998: vol.1, 109］。このような現象は、語と語の連なりにおける音韻環境によって母音変化が生じるということでのみ説明されるとした。

34）アルトーマ［Altoma 1969: 119-120］は補遺として『文法学の解放』の章立てを英訳で掲載している。

35）伝統的なmafʻūlātの分類に関しては［岡崎 2003］を参照。

36）この著作は1978年の時点ですでに版を重ね、第６版に至っている。その多さはいかにアニースの見解が注目されたかを示すものでもある。現在でも、アングロ書店が版数を明示しない形で版を重ねている。

37）ムスタファーも先述の『イウラーブの諸学派』の中で、イウラーブと意味の関係を重視する自らの主張と相反するにもかかわらず、スクーンの性質と母音との音韻関係に注目したアニースの見解を「イウラーブの解釈に有益な新たな試み」［Muṣṭafā 1958: 54］として好意的な評価を示している。

その代表的な例が「スクーン連続の回避」（al-takhalluṣ min iltiqā' al-sākinayn）による母音の生起[38]である。さらに、音韻配列が、単語の音韻環境に様々な変化を生じさせる例として、読誦法における「母音連続による音の軽減」（takhfīf）[39]を挙げている［Anīs 1958: 56］。

以上のような現象から、イウラーブ論で延々と論じられてきたような語末母音の機能は元来存在せず、母音の根幹（aṣl）はスクーンであるという見解を示した。さらに、語末停止（waqf）が古典期においても多用されていた例証として、イムルウルカイスの詩を引いている。

> fa-al-yawm-a ashrab ghayr-a mustaḥqib-ī ithm-an min Allāh-i walā wājil-ī「さて今日は、神から罪を得る者とならず、また他人の家に邪魔する者とならず、（独りで）飲むとするか。」[40]

一人称単数未完了形動詞の ashrab-u は本来直説法として、語末母音 -u を伴わなければならない。しかし、例証では語末停止によるスクーンである。このようなスクーンは通常、動詞の要求法を示すものと考えられるが、この場合はそれにあたらない。同様の事例を数多く挙げ、アニースは主格や直説法が語末母音 -u をとる必然性は認められないと結論付けた。

アニースはこの語末のスクーン停止の現象こそが、イウラーブの問題を解く鍵であるとした。アニースによれば、語末の母音変化は、散文にせよ韻文にせよ、語と語の「接続」（waṣl）の特徴の一つである。発話者は、休止もしくは、文の末尾においては、語末母音を必要とせず、スクーンで停止することになる。すなわち、「接続」を音韻的に必要としない限り、語末母音変化は生起しない［Anīs 1950: 220］。

確かにイウラーブの母音変化は非常に困難であり、外国人学習者のみならず、アラブ人も苦労する部分である。それゆえ、確かにすべてをスクーンによる語末停止でよいということになれば、文法学が一挙に簡略化することは疑いを入れない。しかし、アニースの見解のごとく語末停止を正当化するならば、９世紀の文法家イブン・ファーリス（395/1004 年没）が『サーヒビー』（*al-Ṣāḥibī*）の「話術」（khiṭāb）の章でイウラーブの効用を説く際に挙げる以下の３つの文[41]を、mā aḥsan zayd. という具合にスクーンによる語末停止で発話、もしくは書いて表す場合、アニースの提唱ではいかにして文意の差異を判別することが可能となるのだろうか。実際、アニースの議論はひとつの問題を解決するが、意味の判別という別の問題を作り出した。そのため、必ずしも広がることはなかった。

① mā aḥsan-a zayd-an.「なんとザイドのよいことか。」
② mā aḥsan-u zayd-in.「ザイドの最もよいところは何か。」
③ mā aḥsan-a zayd-un.「ザイドは上手くなかった。」

アニースの試みは、それまでのイウラーブに固執した文法学への反省から、音韻論に着目し、イ

38）例えば、kutiba ‘alay-kum-ū (a)l-ṣiyām（Q 2:183）、min-ā (a)l-kitāb、qālat-i (i)ḍrib など。［Anīs 1950: 251-253 参照］

39）例えば、読誦法によっては、’ari-nā を ’ar-nā（Q 2:128）、yu‘allimu-humu al-kitāb を yu‘allim（Q 2:129）、ya’muru-kum を ya’mur（Q 3:129）など、母音連続による音の重さを回避するために、一部の母音を軽くして誦む［Ḍayf 1994: 12 参照］。

40）命令形で fa-ishrab とする伝承もある［Imru’ al-Qays 2000: vol.1, 300］。また、別の校訂版［Imru’ al-Qays 1958: 122］では、ashrab ではなく usqā となっている。

41）筆者が引用した用例は、ヌールッディーンによる解説［Nūr al-Dīn 2003: 52］では、①は感嘆文で、mā は感嘆の辞詞（mā al-ta‘ajjubīya）、②は比較級（最上級）の文で、mā は疑問詞、③は動詞文で、mā は否定辞となる。

ウラーブの必要性を再検討するものであった。これは一見すると、口語で用いられているスクーンの語末停止をフスハーの代替にすることを目指しているように映るが、そうではない。古典の事例を入念に引きながらスクーンの語末停止の正当性を論じた文法学的な貢献と言える。

ムスタファーとアニースの提起などによって、イウラーブ論はすべてのスペクトラムが揃ったと言える。すなわち、古典文法学においては、バスラ学派の流れを汲み、推定されるアーミル（作用語）を盛んに議論する極めて難解なイウラーブ論、それに比べるとアーミル論に依拠するものの、言語の慣例（samāʻ）の重視から、より実態に即したクーファ学派の流れを汲むイウラーブ論がある。そして 20 世紀に入り、ムスタファーなどの提唱による大幅に簡略化されたイウラーブ論、アニースに代表されるイウラーブ論の廃止とも言える語末のスクーン停止論が登場した。このようなイウラーブの議論は現代においてどのように収斂しているのであろうか。次節でそれを検討する。

Ⅴ．現代におけるイウラーブ論

１．語末のスクーン停止に関するアカデミー決議

本節では、20 世紀中葉以降のイウラーブ論がどのような形となっているか具体的に検証する。まず最初に、イウラーブ論でも煩瑣な議論のひとつにあたる人名の場合の規則を取り上げ、そこで語末のスクーン停止をめぐる議論がどう決着したかを見る。続いて、様々な経過を経て、いかなるイウラーブの定義に落ち着いているかを検討する。

アラビア語の人名は通常、自分、父、祖父（場合によっては、さらに何代かの父祖）の名前を順に配列し、各名前の間に「～の息子」の意味の ibn を入れて表される[42]（女性の場合は～の娘 ibna[t] または bint）。ibn の語頭のアリフは一時性のハムザのため落ちるので bn と表される[43]。

古典文法の規則によれば、「ハサンの息子であるアリーの息子であるムハンマド」の主格は muḥammad-u bn-u ʻaliyy-i bn-i ḥasan-in となる。アーミル（作用語）の作用を受け、文の中に位置する単語として格変化する部分は、先頭の語（この場合 muḥammad）のみである。ibn は常に前置される名前と同格で置かれる。つまり ibn の語末母音は、前置される名前の語末母音に従う。ibn に後続する名前は ibn を属格支配（イダーファ）するため属格で置かれ、その支配が主たる作用となる［図２］。

ibn は前置される名詞と同格関係にあり、その ibn を後続支配するのは後続する属格名詞（名前）である。従って、ibn のタンウィーンは失われる。一方で、最後尾以外の名前がタンウィーンを失っているのは、ibn や後続する属格名詞による限定作用によるものではない。これが古典文法の解釈をさらに複雑にしている。

［図２］

jāʼa	⇒	muḥammad-u	＝	bn-u	←	ʻaliyy-i	＝	bn-i	←	ḥasan-in.
動詞		主格		同格		属格		同格		属格
（主格にする作用語）										

42）その前にクニヤ（kunya）と呼ばれる「～の父」（abū ～）を置く場合もある。系譜的出自であるナサブ（nasab）を加え、さらに出身などを表すラカブ（laqab）を置くことも多い。ここでは、クニヤ、ナサブ、ラカブは語末のスクーン停止の問題には関わりがないため深入りしない。

43）ibn および ibna の表記と諸規則については［Wright 1981: 23, 250］を参照。

現代に入ると、簡略化の流れとともに、ibn の省略が慣用となってきた[44]。しかし、その用法に、従来のイウラーブを展開すると様々な問題が生じてくる。一つは、ibn を省略したことで、作用語の作用がどの名前まで及ぶかが明確でなくなる。さらに、２番目以降の名前が、ibn ではなく前置する名詞を属格支配するというその作用そのものに矛盾が生じる。muḥammad-u ‘aliyy-i ḥasan-in における「ハサンの」は「アリー」への属格支配ではなく、「アリーの」も同様、「ムハンマド」への属格支配ではない。

また、口語やメディア等の現代用法では、ibn の省略とともに、各名前をスクーンによって語末停止する用法が多く見られる［al-‘Uṣaymī 2002: 254］[45]。これに関するイウラーブの解釈も現代語では迫られることになった。

このために、1955 年、カイロのアラビア語アカデミーの委員の一人であったアフマド・ザイヤート（Aḥmad Ḥasan al-Zayyāt）は、ibn を省略した上で語末停止にする jā’a muḥammad ‘aliyy ḥasan.「ハサンの息子であるアリーの息子のムハンマドがやって来た」という用法が、正用法として認められるか否かの判断をアカデミーに求めた。アカデミーはこれを受け、まずは文法理論委員会（lajna al-uṣūl）[46] による審議を開始した［al-Zayyāt 1960: vol.12, 61-69］[47]。この委員会にはフーリーやアニースが参加し、積極的にスクーンの語末停止の議論を展開した[48]。アニースの提唱した語末のスクーン停止によるイウラーブの廃止論は、現実的な影響を持ち始めたのである。

この文法理論委員会の判断は、先の用法を正用法と認めるもので、「それは、読む者、書く者にとっての簡略化となり、イウラーブの難点を除去することに繋がる」という語末のスクーン停止を積極的に評価するものであった［Amīn 1969: 163］。この判断はアカデミー総会に上程され、第 31 回総会の第８分科会（1965 年）で本格的に審議された。

しかし、この分科会では決着がつかず、アカデミーはこの判断について、1965 年以降、幾度となく討論を重ねた。各総会では文法学者をはじめ多方面から、この問題をめぐって様々な考察と提案が出された[49]。語末停止の推進派には、アカデミーの方言委員会（lajna al-lahjāt）があった。この方言委員会は、「現代アラビア語では、ibn の省略と固有名詞の語末のスクーン停止は、言語階層の違いこそあれ広く流布している」という点を強調し、その根拠として（１）クルアーンの読誦法に見られる現象である、（２）タミーム族の方言、アサド族の方言、ナジュド方言に存在する、（３）言語資料としての古詩等の例証に存在する、などの根拠を挙げ、「フスハーでも否定されるべき現象ではなく、現代用法として是認すべき」という見解を出した［al-Tarzī 1984: 36-37］。

文法理論委員会による初の審議から 13 年を要し、ようやくアカデミーは 1978 年に開催された第 44 回総会、第７分科会で最終決議を出した。それは、ibn の省略を認める一方で、イウラーブに関しては２つの最終決議を出すという意外な結末であった。一つは「先頭の名前を文の位置によって

44）ibn の省略に関する論考は［al-Sayyid 1988: 168-181］を参照のこと。

45）現代標準アラビア語における休止と接続の現象を論じたものに［Holes 1995: 52-55］がある。

46）出席した委員会メンバーはフーリーやアニースを含む計 11 名［Amīn 1964: 187］。

47）各委員から様々な見解が示される中、イニシアチブをとったのはスクーンによる語末停止の推進者であるアニースであった。先の問題に関するアニース自身の見解は 1964 年アカデミー発行の『言語の諸原理の書』［Amīn 1969: 164-165］に掲載されている。その中でアニースはアブー・アムルの読誦法に着目し語末のスクーン停止を論じている。一例を挙げると、ハフスの読誦では tamlikūna khazā’in-a raḥmat-i rabbi-y（Q 17:100）や wa al-hady-a wa al-qalā’id-a dhālika（Q 5:97）と母音を付けて下線部を読むが、アブー・アムルは母音を付けずにスクーンで読む（結果として次の文字への同化吸収〔idghām〕が生じ、khazā’ir ‿ raḥmat-i〔n → r〕、al-qalā’idh ‿ dhālika〔d → dh〕と読まれる）。

48）他にも、アニースが注目した「子音連続の回避」も具体的な議論へと発展した。詳しくは［MLAQ 1955: 241-244］を参照。

49）この議題に関する提案は、［Amīn 1969: 163-199］に掲載されている。

イウラーブさせ、以下はイダーファ（後続属格名詞による支配）による属格」という決議であり、もう一方は「休止（waqf）で各語を繋ぐゆえに、各名前をすべてスクーンとする」というものである。ただし後者については、文法理論委員会のメンバーの中であるフーリーから、「イウラーブを聞かれたら、冒頭の語の文における位置に基づき、主格、属格、対格いずれかで答える」という追加修正案や［Amīn 1969: 178］、アカデミー委員を務め、ダールルウルーム元教授のハサン（‘Abbās Ḥasan）から、「そもそもイウラーブにおいては、muḥammad ‘aliyy ḥasan は一語として扱うべき」という見解などが相次いで出されている［al-Tarzī 1984: 37］。

第一決議の「以下はイダーファによる属格」とは、古典文法における各語のイウラーブを継承する決議であり、もう一方は、アニースらの提唱による語末のスクーン停止の議論を採り、休止で繋ぐという解釈に応用したものである。後者は、古典においてもそこで息継ぎなどで休止した場合には母音を読まないという規則を、この連続する名前の一語ずつに当てはめるという便法を生み出した。第一の決議に従えば、jā’a muḥammad-u ‘aliyy-i ḥasan-in. となり、第二の決議に従えば、jā’a muḥammad ‘aliyy ḥasan. となる[50]。

この決議はまず、現代アラビア語の再整備において、古典文法で煩瑣と思われた規則について改革派の主張がある程度反映されたと見ることができる。この名前の語末スクーン停止に限るにしても、アニースのような極端なイウラーブ廃止論がそれなりの地歩を得たと見ることもできる。しかし、一つの事項の決定に20年近くの月日を要したこと、さらに古典派と改革派の流れを汲む両論併記が結論となったことは、イウラーブ論をめぐる複雑な状況を表している。

２．現代におけるイウラーブの定義

古典文法では、アーミルとイウラーブという因果律に基づき議論がなされた。中でもバスラ学派は特に架空のアーミルを設定してまで、アーミルとイウラーブの結びつきを理論化しようとした。しかし、ムスタファーに代表される古典文法理論批判によって、バスラ学派的な解釈や抽象的な理論は、教育文法には無益であるとの主張がそれなりに定着した。つまり、20世紀中葉以降のイウラーブ論は、バスラ学派的な煩瑣な議論を排除して、クーファ学派的な言語の慣用主義と、文法改革論の間でどこに落ち着くかという状態にあった。この時期は民族語としてのアラビア語が形成され確立していく時期とも重なる。

長年にわたる議論の一つの帰結は、古典文法との連続性を確保しつつも、イウラーブを現代的なアラビア語として運用するという道であった。

その中間の道の代表的な文法書として、現代アラビア語論に関する著作を数多く持つ[51] ダールルウルーム学部元教授のイード（Muḥammad ‘Īd）による文法書『精選文法』（*al-Naḥw al-Muṣaffā*）が挙げられる。イードは、イウラーブの章で、まずエジプト学派を代表する文法家であるイブン・ヒシャーム（Ibn Hishām, 761/1360年没）の定義「イウラーブとは語末において、アーミルがもたらした顕在的、推定的な跡」を引いている。典拠である『露の滴』（*Qaṭr al-Nadā*）は、ダイフ［Ḍayf 1986: 18］によれば、現在でも伝統的な文法教育で用いられている代表的な文典である。イードは、古典的定義を挙げた上で、現代の文法学でどのようにイウラーブを捉えるべきかを論じている。彼は「イウラーブとは、文法的機能（waẓīfa）を表わすものである」と再定義した上で、「文法学は

50）第三の決議案として、最後を除く名前の語末をスクーン停止させ、最後（例では３番目）の名前を格変化させるという議案もあった［al-Tarzī 1984: 37］。これに従えば、jā’a muḥammad ‘aliyy ḥasan-un. となるが、採択はされなかった。

51）『フスハーと口語における言語階層』、『フスハーの危機的状況』、『言語・文学研究における現代の諸問題』など。

名詞文、動詞文という文の構成（ta'līf al-jumla）に関わるものである」とし、「文の中における語の文法的機能は語末母音の変化、すなわちイウラーブによって変わる」と解説する。一方でアーミルについては「諸文法家が考えたように、イウラーブとはアーミルがもたらした跡ではあるが、アーミルとは厄介で棘のある抽象的な概念である。（…中略…）固執する必要は全くなく、アーミルをめぐる様々な議論は無視するべきである」と辛辣な批評をしつつも、古典文法におけるアーミルの存在とイウラーブとの関係を否定する立場はとっていない[52]。

イードは古典文法理論の中枢をなしていたアーミル、すなわち「因」に関しては詮索することをやめるという立場をとり、「果」であるイウラーブに関しては「アーミルの結果」という捉え方から、単語が文の中で果たす「文法的機能（waẓīfa）」という考えに移行している。それは、原因論で結果を操作するのではなく、結果の中に含まれる機能を抽出し文法を理解するという立場である。

現代文法において、「ムハンマドはザイドを打った」を意味する ḍaraba muḥammad-un zay-dan. / muḥammad-un ḍaraba zayd-an. / zayd-an ḍaraba-hu muḥammad-un の zayd がナサブ（対格）を取るのは、ḍaraba が持つ作用や、文の前に存在すると想定されるアーミル（作用語）による作用の結果ではない。zayd が文の中で目的語の機能を -an という語末母音の変化で果たすことができるからである。語末の母音変化が文中における語の機能を表すことで、語順の柔軟性を生み、その結果、共通の意味をなす先の３つの文が生成される。

この文法学における「機能」という概念は、「アラブ教育文化学術機構」（以下、英語の略称 ALECSO を使う）が発行する『一般教育課程用アラビア語文法便覧』[53] のイウラーブの定義「ことばの位置に適するように語末母音が変わること、または文における語の職能」［al-Shitāwī et al.1996］にも見ることができる。同書では、語末の母音変化が何によって起こるのかについて、「文における語の職能が変わることによって」と説明している。

また ALECSO が発行する『基本アラビア語辞典』（*al-Mu'jam al-Asāsī*）、アカデミーが発行する『アラビア語中辞典』（*al-Mu'jam al-Wasīṭ*）では、イウラーブを「ラフウ（主格・直説法）、ナスブ（対格･接続法）、ジャッル（属格）、ジャズム（要求法）という語末に付随する変化」と定義している。そして、『アラビア語中辞典』では、先の定義文に従属する形で「文法規則において明らかにされるものに基づき（'alā mā mubayyan fī qawā'id al-naḥw）」という記述が続く。「明らかにされるもの」という間接的な表現は「文の位置」「職能」「アーミル」と読む者によって様々に解釈され得る。一方、『基本アラビア語辞典』では、上記の定義に加え、イウラーブの３つ目の意味[54] として「文法規則に則って、この変化の諸原因（asbāb）を明らかにすること」と記されている。「諸原因」とは、まさに語末母音の変化を生起させるアーミルのことである。

現代文法の主眼は、煩雑な文法理論の解釈よりも、言語の運用性に置かれる。現代では、構文の

52）このような古典的立場を認めつつ現代向けの文法書を編むという立場は、現代に多く見られる。アカデミー委員を務め、かつてダールルウルームでも教鞭をとった前述のハサン（'Abbās Ḥasan）による文法書『完全文法』（*al-Naḥw al-Wāfī*）もその類に入ろう。池田は「4 世紀以降の規範的な文法学が、現在のアラブにおける主流をなすものであり」［池田 1969: 45］とした上で、この『完全文法』を、その代表例として挙げている。他にも、ダールルウルーム学部元教授サイード（Amīn 'Aliyy al-Sayyid）著『文法学論』（*Fī 'Ilm al-Naḥw*）もまた、アーミルを含む古典的定義から現代文法を説明しようと試みるものとして有名である。カイロのダールルマアーリフ社より刊行され、今に至るまで多くの版を重ねている。

53）ALECSO はアラブ連盟の傘下に 1964 年に設立され、チュニスに本部を置いている。指針の一つに「ウンマの記憶媒体、およびウンマの遺産の宝庫としてのアラビア語の保持」を掲げている［al-Zayn 1989: 204］。前掲書もチュニスで発行されているが、対象は全アラブ諸国と明記されている［al-Shitāwī et al.1996: 7］。また、本書の監修はダールルウルーム学部言語学科教授でカイロのアラビア語アカデミー副総裁を務める、カマール・ビシュル（Kamāl Bishr）である。他にも ALECSO は 14 のアラブ諸国における文法事項の学習達成度に関する便覧［al-Nāqa 2003］を発行している。

54）もう一つの意味は、動詞 a'raba のマスダル。

理解と正しい文の生成が文法教育の主要な課題となり、イウラーブの再定義はそれを背景に提示された。イードは、アーミルの存在を認めつつも、イウラーブをアーミルと切り離し、「文法的機能」を重視することで新たな立場を示した。それは、アーミル論を基盤とする古典文法との通廊を確保しつつも、現代の文法学を言語運用に益する形で再配置するという試みであった。

VI. 結語

アラビア語文法学は、19 世紀から 20 世紀にかけて、一部の知識人と文法学者が主として論じるものから、学校で一般の人々に教えられる教育文法へと転換を遂げた。

古典文法では、アーミル（作用語）がその語を主語や、目的語にするために、語末母音を変化させていた。従って文法学の関心は、変化を生起させる作用語の特定と、その作用の仕方を詮索することに専ら向けられていた。

現代に入り、古典的理論への批判が議論される中、アーミル論のみならず、イウラーブ論もまた同時に批判に晒された。延々たる文法改革の議論は、現代の文法学にとって大事なものは何かを再考することでもあった。教育の近代化を遂げ、誰もがアラビア語を読み書きする時代において、文法は人々のアラビア語運用能力を高めるためにあるべきものとなった。その最大の理由は、学校文法の登場である。万人へ開かれた文法学が担う社会的機能は、専門的な議論から、リテラシー向上のための教育へと変わった。

その結果、現代文法では古典文法理論の中枢をなしていたアーミル論からイウラーブ論を切り離すことで、語末母音の変化を捉えなおした。文法学の観点は、作用の結果としての語末母音の変化から、文法的機能を果たす語末母音の変化＝機能主体としてのイウラーブへと移ったのである。それにより現代アラビア語では、語末変化が生起させられた云々はもはや重要ではなく、語末が変化することで、その機能を果たしていることが重要となる。つまり、アラビア語の語尾変化は、語が持つ文法的機能を示すために存在する。このように新たな位置づけと重要性を獲得したイウラーブの存在こそ、現代アラビア語の特徴を如実に示すものと言えよう。

参考文献

［和文文献］

新井政美 2001『トルコ近現代史』みすず書房.
池田修 1968「’ABU L-’ASWAD D-DU’ALI をめぐって」『大阪外国語大学学報』19, pp.61-69.
――― 1969「10 世紀以降のアラビア語研究の歴史」『大阪外国語大学学報』22, pp.35-49.
――― 1973「アラブ文法学における ‘Āmil 論」『大阪外国語大学学報』29, pp.25-33.
岡崎英樹 2003「アラブ伝統文法における maf‘ūl の下位範疇」『関西アラブ・イスラム研究』関西アラブ研究会 3, pp.15-32.
木村喜博 1987『東アラブ国家形成の研究』354, アジア経済研究所.
小杉泰 1994『現代中東とイスラーム政治』昭和堂.
――― 2006『現代イスラーム世界論』名古屋大学出版会.

勝沼聡 2006「サラーマ・ムーサー：立憲王制期カイロにおけるコプト教徒知識人」『アラブ遊学』86, pp.116-125.

竹田敏之 2006「現代エジプトにおける文法改革―イブラーヒーム・ムスタファーの古典文法批判と文部省委員会―」『日本中東学会年報』22-2, pp.29-52.

新妻仁一 1990「フスハーとアンミーヤ」『東と西：東西思想文化比較試論』亜細亜大学言語文化研究所（編）8, pp.65-81.

日本国際問題研究所編 2001『中東基礎資料調査―主要中東諸国の憲法（上・下）』日本国際問題研究所.

［欧文文献］

Altoma, Salih. 1969. *The Problem of Diglossia in Arabic: A Comparative Study of Classical and Iraqi Arabic*. Cambridge: Harvard University Press.

Dévényi, Kinga. 2007. "'I'rāb," in Kees Versteegh and Mushira Eid eds., *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics*, Leiden: Brill, vol.2, pp.401-406.

Flanz, Gisbert H. ed. 1971. *Constitutions of the Countries of the World*. 20 vols. Dobbs Ferry, New York: Oceana Publications.

Goldziher, Ignaz. 1994. *On the History of Grammar among the Arabs: An Essay in Literary History*. trans. and eds. by Kinga Dévényi and Tamás Iványi. Amsterdam and Philadelphia: J. Benjamins.

Hagen, Gottfried. 2008. "Ottoman Empire," in Kees Versteegh and Mushira Eid eds., *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics*, Leiden: Brill, vol.3, pp.501-505.

Holes, Clive. 1995. *Modern Arabic: Structures, Functions and Varieties*. London and New York: Longman.

Kahle, Paul. 1949. "The Arabic Readers of the Koran," *Journal of Near Eastern Studies* 8(2), pp.65-71.

Levin, Aryeh. 1995. "The Fundamental Principles of the Arab Grammarians' Theory of 'Amal," *Jerusalem Studies in Arabic and Islam* 19, pp.214-232.

Suleiman, Yasir. 1999. *The Arabic Grammatical Tradition: A Study in ta'līl*. Edinburgh: Edinburgh University Press.

———. 2003. *The Arabic Language and National Identity*. Washington, D.C.: Georgetown University Press.

Versteegh, Kees. 1983. "A Dissenting Grammarian: Quṭrub on Declension," *Historiographia Linguistica* 8(2, 3), pp.403-429.

———. 1995. *The Explanation of Linguistic Causes: az-Zaǧǧāǧī's Theory of Grammar*. Amsterdam and Philadelphia: J. Benjamin.

———. 1997. *The Arabic Language*. New York: Columbia University Press.

Wright, William. 1981. *A Grammar of the Arabic Language*. 3rd. ed., 2 vols., Beirut: Librairie du Liban.

［アラビア語文献］

'Abd al-'Azīz, Muḥammad Ḥasan. 1985. *al-'Arabīya al-Fuṣḥā al-Ḥadītha: Buḥūth fī Taṭawwur al-Alfāẓ wa al-Asālīb*. al-Qāhira: Dār al-Namr.

al-Afghānī, Sa'īd. 1971. *Min Ḥāḍir al-Lugha al-'Arabīya*. Bayrūt: Dār al-Fikr.

Amīn, Muḥammad Shawqī. 1964. “A‘māl Lajna al-Uṣūl,” in Sa‘īd Zāyid and Ḍāḥī ‘Abd al-Bāqī eds., *al-Buḥūth wa al-Muḥāḍarāt*, al-Qāhira: Majma‘ al-Lugha al-‘Arabīya, 31, pp.187-188.

———. 1976. “Qawl fī al-I‘rāb,” *Majalla Majma‘ al-Lugha al-‘Arabīya*, al-Qāhira: Majma‘ al-Lugha al-‘Arabīya, 37, pp.60-69.

Amīn, Muḥammad Shawqī and Muḥammad Khalaf Allāh Aḥmad eds., 1969. *Kitāb fī Uṣūl al-Lugha*. vol.1. al-Qāhira: al-Hay’a al-‘Āmma li-Shu’ūn al-Maṭābi‘ al-Amīrīya.

Anīs, Ibrāhīm. 1950. *Min Asrār al-Lugha*. al-Qāhira: Maktaba al-Anjilū.

———. 1958.“Ra’y fī al-I‘rāb,” *Majalla Majma‘ al-Lugha al-‘Arabīya*, al-Qāhira: Maṭba‘a al-Taḥrīr, 10, pp. 55-56.

Badawī, al-Sa‘īd. 1973. *Mustawayāt al-‘Arabīya al-Mu‘āṣira fī Miṣr: baḥth fī ‘Alāqāt al-Lugha bi-al-Ḥaḍāra*. al-Qāhira: Dār al-Ma‘ārif.

Bārk, Jāy Wūn. 2007. *Naẓarīya al-Adab wa al-Lugha ‘inda Salāma Mūsā*. al-Qāhira: Maktaba al-Ādāb.

al-Danāṣūrī, Fahīm Ḥāfiẓ. 1986. *Aḥmad Amīn wa Atharu-hu fī al-Lugha wa al-Naqd al-Adabī*. al-Qāhira: Maktaba al-Malik Fayṣal al-Islāmīya.

Ḍayf, Shawqī. 1968. *al-Madāris al-Naḥwīya*. 8th. ed. al-Qāhira: Dār al-Ma‘ārif.

———. 1986. *Taysīr al-Naḥw al-Ta‘līmī Qadīman wa Ḥadīthan*. al-Qāhira: Dār al-Ma‘ārif.

———. 1994. *Taḥrīfāt al-‘Āmmīya li-l-Fuṣḥā fī al-Qawā‘id wa al-Binyāt wa al-Ḥurūf wa al-Ḥarakāt*. al-Qāhira: Dār al-Ma‘ārif.

al-Dūrī, ‘Abd al-‘Azīz. 2005. “al-Judhūr al-Tārīkhīya li-al-Qawmīya al-‘Arabīya,” *Turāth al-Fikr al-Siyāsī*, eds. by Yūsuf Ībish and Kosugi Yasushi, 2nd ed. Bayrūt:Turāth, pp.509-516.

Farḥāt, Girmānūs. 1995. *Baḥth al-Maṭālib fī ‘Ilm al-‘Arabīya*. Bayrūt: Maktaba Lubnān.

Furayḥa, Anīs. 1955. *Naḥw ‘Arabīya Muyassara*. Bayrūt: Dār al-Thaqāfa.

al-Ḥalabī, Aḥmad ibn Yūsuf. 1986. *al-Durr al-Maṣūn fī ‘Ulūm al-Kitāb al-Maknūn*. ed. by Aḥmad Muḥammad al-Kharrāṭ. 11 vols. Dimashq: Dār al-Qalam.

al-Ḥamawī, Abū ‘Abd Allāh Yāqūt ibn ‘Abd Allāh. 1936. *Mu‘jam al-Udabā’*. ed. by Aḥmad Farīd al-Rifā‘ī . 6 vols. al-Qāhira: Maṭbū‘āt Dār al-Ma’mūn.

al-Harrāwī, ‘Abd al-Samī‘ Sālim. 1962. *Lugha al-Idāra al-‘Āmma fī Miṣr*. al-Qāhira: al-Majlis al-A‘lā li-Ri‘āya al-Funūn wa al-Ādāb wa al-‘Ulūm al-Ijtimā‘īya.

Ḥasan,‘Abbās. 1981. *al-Naḥw al-Wāfī*. 7th ed. 4 vols. al-Qāhira: Dār al-Ma‘ārif.

Ḥasanayn, Aḥmad Ṭāhir. 1983. *Dawr al-Shāmīyīn al-Muhājirīn ilā Miṣr fī al-Nahḍa al-Adabīya al-Ḥadītha*. Dimashq: Dār al-Wathba.

Ḥusayn, Ṭāhā. 1959. “Mushkila al-I‘rāb,” *Majalla Majma‘ al-Lugha al-‘Arabīya*, al-Qāhira: Maṭba‘a al-Taḥrīr. 11, pp.89-102.

al-Ḥuṣrī, Abū khaldūn Sāṭi‘. 1985. *al-‘Urūba bayna Du‘āti-hā wa Mu‘āriḍī-hā*. Bayrūt: Markaz Dirāsāt al-Waḥda al-‘Arabīya.

Ibn Fāris, Aḥmad. 1993. *al-Ṣāḥibī fī Fiqh al-Lugha al-‘Arabīya wa Masā’ili-hā wa Sunan al-‘Arab fī Kalāmi-hā*. ed. by ‘Umar Fārūq al-Ṭabbā‘. Bayrūt: Maktaba al-Ma‘ārif.

Ibn al-Ḥājib, Jamāl al-Dīn Abū ‘Amr ‘Uthmān. 1997. *Sharḥ al-Muqaddima al-Kāfiya fī ‘Ilm al-I‘rāb*. ed. by Jamāl ‘Abd al-‘Āṭī Mukhaymar. al-Riyāḍ: Maktaba Nazār Muṣṭafā al-Bāz.

Ibn Jinnī, Abū al-Fatḥ ‘Uthmān. 1998. *al-Muḥtasab fī Tabyīn Wujūh Shawādhdh al-Qirā’āt wa al-Īḍāḥ ‘an-*

hā. ed. by Muḥammad ‘Abd al-Qādir ‘Aṭā. 2 vols. Bayrūt: Dār al-Kutub al-‘Ilmīya.

‘Īd, Muḥammad. 1971. *al-Naḥw al-Muṣaffā*. al-Qāhira: Dār Nashr al-Thaqāfa.

Imru’ al-Qays. 1958. *Dīwān Imru’ al-Qays*. ed. by Muḥammad Abū al-Faḍl Ibrāhīm. al-Qāhira: Dār al-Ma‘ārif.

———. 2000. *Dīwān Imru’ al-Qays wa Mulḥaqāti-hi bi-Sharḥ Abī Sa‘īd al-Sukkarī*. eds. by Anwar ‘Alyān Abū Suwaylam and Muḥammad ‘Aliy Shawābika. al-‘Ayn: Markaz Zāyd li-l-Turāth wa al-Tawzī‘.

al-Jāḥiẓ, Abū ‘Uthmān ‘Amr. n.d. *al-Bayān wa al-Tabyīn*. Bayrūt: Dār al-Kutub al-‘Ilmīya.

al-Jahshiyārī, Abū ‘Abd Allāh Muḥammad. 1938. *Kitāb al-Wuzarā’ wa al-Kuttāb*. eds. by Ibrāhīm al-Ibyārī and ‘Abd al-Ḥāfiẓ Shalabī. al-Qāhira: Maṭba‘a Muṣṭafā al-Bābī al-Ḥalabī wa Awlādi-hi.

al-Jawārī, Aḥmad ‘Abd al-Sattār. 1984. *Naḥw al-Taysīr: Dirāsa wa Naqd Manhajī*. Baghdād: Maṭba‘a al-Majma‘ al-‘Ilmī al-‘Irāqī.

al-Jurjānī, Abū Bakr ‘Abd al-Qāhir. 2005. *al-‘Awāmil al-Mi’a al-Naḥwīya*. ed. by al-Badrāwī Zahrān. 5th. ed. al-Qāhira: Dār al-Ma‘ārif.

al-Jurjānī, al-Sayyid al-Sharīf ‘Aliyy ibn Muḥammad. 1987. *al-Ta‘rīfāt*. ed. by ‘Abd al-Raḥmān ‘Umayra. Bayrūt: ‘Ālam al-Kutub.

al-Karīm, ‘Abd Allāh Aḥmad. 2004. *al-Dars al-Naḥwī fi al-Qarn al-‘Ishrīn*. al-Qāhira: Maktaba al-Ādāb.

al-Khūlī, Amīn. 1944. *Hādhā al-Naḥw?: Baḥth Mustakhraj min Majalla Kullīya al-Ādāb*, al-Qāhira: Maṭba‘a al-I‘timād, 7, pp. 1-40.

Khūrī, Yūsuf Qazmā.1995. *Rajul Sābiq li-‘Aṣri-hi: al-Mu‘allim Buṭrus al-Bustānī 1819-1883*. Bayrūt: Baysān li-l-Nashr wa al-Tawzī‘.

Madkūr, Ibrāhīm and Ibrāhīm Anīs eds. 1985. *al-Mu‘jam al-Wasīṭ*. 2 vols. al-Qāhira: Majma‘ al-Lugha al-‘Arabīya.

Mazīd, ‘Aliy Maḥmūd. 1973. *Aḥmad Amīn Lughawīyan*. al-Qāhira: al-Maṭba‘a al-‘Ālamīya.

MFAL = Majma‘ Fu’ād al-Awwal li-l-Lugha al-‘Arabīya. 1951. “Qarārāt Mu’tamar al-Majma‘,” *Majalla Majma‘ Fu’ād al-Awwal li-al-Lugha al-‘Arabīya*, al-Qāhira: al-Maṭba‘a al-Amīrīya, 6, pp.193-197.

MLAQ = Majma‘ al-Lugha al-‘Arabīya bi-al-Qāhira. 1955. “Qarār Lughawī: Ibāḥa al-Madd ‘inda Iltiqā’ al-Sākinayn li-Daf‘ al-Labs,” *Majalla Majma‘ al-Lugha al-‘Arabīya*, al-Qāhira: Maṭba‘a Wizāra al-Tarbiya wa al-Ta‘līm, 8, pp.241-244.

Mūsā, Salāma. 1945. *al-Balāgha al-‘Aṣrīya wa al-Lugha al-‘Arabīya*. al-Qāhira: al-Maṭba‘a al-‘Aṣrīya.

Mūshī, Idrīs Maḥmūd Ḥāmid. 2005. *al-Lugha al-‘Arabīya wa ‘Alāqatu-hā bi-al-Lughāt al-Iritrīya (al-Ja‘zīya wa al-Tajrīya wa al-Tajranīya): al-Judhūr wa al-Imtidād*. Ṭarābulus: Kullīya al-Da‘wa al-Islāmīya.

Muṣṭafā, Ibrāhīm. 1937. *Iḥyā’ al-Naḥw*. al-Qāhira: Maṭba‘a al-Lajna li-al-Ta’līf wa al-Tarjama wa al-Nashr.

———. 1958. “Madhāhib al-I‘rāb,” *Majalla Majma‘ al-Lugha al-‘Arabīya*, al-Qāhira: Maṭba‘a al-Taḥrīr, 10, pp.51-54.

Muṣṭafā, Ibrāhīm and Muḥammad Barāniq. 1958. *Taḥrīr al-Naḥw*. al-Qāhira: Dār al-Ma‘ārif.

al-Nāqa, Maḥmūd Kāmil and Ḥusayn Bashīr Maḥmūd eds. 2003. *Taḥdīd Mustawayāt al-Ta‘līm fī al-Riyādīyāt wa al-‘Ulūm wa al-Naḥw fī al-Ta‘līm al-Thānawī*. Tūnis: al-Munaẓẓama al-‘Arabīya li-l-Tarbiya wa al-Thaqāfa wa al-‘Ulūm.

Nāṣif, ‘Aliy al-Najdī. 1968. *Abū al-Aswad al-Du’alī: ‘Aṣru-hu, Ḥayātu-hu, Āthāru-hu al-‘Ilmīya wa al-Adabīya*. al-Qāhira: al-Majlis al-A‘lā li-l-Shu’ūn al-Islāmīya.

Nūr al-Dīn, ‘Iṣām. 2003. *Muḥāḍarāt fī Fiqh al-Lugha*. Bayrūt: Dār al-Kutub al-‘Ilmīya.

Qabāwa, Fakhr al-Dīn. 2003. *Mushkila al-‘Āmil al-Naḥwī wa Naẓarīya al-Iqtiḍā’*. Dimashq: Dār al-Fikr.

Sa‘īd, ‘Abd al-Wārith Mabrūk. 1985. *Fī Iṣlāḥ al-Naḥw al-‘Arabī*. al-Kuwayt: Dār al-Qalam.

al-Ṣāliḥ, Ṣubḥī. 1970. *Dirāsāt fī Fiqh al-Lugha*. 4th. ed., Bayrūt: Dār al-‘Ilm li-l-Malāyīn.

al-Sayyid, Amīn ‘Aliy. 1982. *Fī ‘Ilm al-Naḥw*. 5th. ed., 2 vols. al-Qāhira: Dār al-Ma‘ārif.

———. 1988. “Ḥawla Ḥadhf Kalima “Ibn” bayna al-A‘lām,” *Majalla Majma‘ al-Lugha al-‘Arabīya*, al-Qāhira: Majma‘ al-Lugha al-‘Arabīya, 62, pp. 168-181.

Sawā‘ī, Muḥammad. 1999. *Azma al-Muṣṭalaḥ al-‘Arabī fī al-Qarn al-Tāsi‘ ‘Ashar*. Dimashq: al-Ma‘had al-Faransī li-l-Dirāsāt al-‘Arabīya.

al-Shitāwī, ‘Abd al-‘Azīz and ‘Aliy Ḥabbūra eds. 1996. *al-Kitāb al-Marji‘ fī Qawā‘id al-Lugha al-‘Arabīya li-Marāḥil al-Ta‘līm al-‘Āmm*. Tūnis: al-Munaẓẓama al-‘Arabīya li-l-Tarbiya wa al-Thaqāfa wa al-‘Ulūm.

Shurrāb, Muḥammad Muḥammad Ḥasan. 1990. *Mu‘jam al-Shawārid al-Naḥwīya wa al-Fawa’id al-Lughawīya*. Dimashq: Dār al-Ma’mūn li-l-Turāth.

Sībawayhi, ‘Amr ibn ‘Uthmān ibn Qanbar. 1999. *al-Kitāb*. ed. by Imīl Badī‘ Ya‘qūb. 5 vols. Bayrūt: Dār al-Kutub al-‘Ilmīya.

al-Tahānawī, Muḥammad ‘Aliy. 1996. *Mawsū‘a Kashshāf Iṣṭilāḥāt al-Funūn wa al-‘Ulūm*. ed. by ‘Aliy Daḥrūj and Rafīq al-‘Ajam. 2 vols. Bayrūt: Maktaba Lubnān.

al-Ṭahṭāwī, Rifā‘a Rāfi‘. 1851. *Kitāb al-Tuḥfa al-Maktabīya li-Taqrīb al-Lugha al-‘Arabīya*. al-Qāhira: s.n.

al-Ṭanṭāwī, Muḥammad. 1995. *Nash’a al-Naḥw wa Tārīkh Ashhar al-Nuḥāt*. al-Qāhira : Dār al-Ma‘ārif.

al-Tarzī, Ibrāhīm and Muḥammad Shawqī Amīn. 1984. *Majmū‘a al-Qarārāt al-‘Ilmīya fī Khamsīn ‘Ām*. al-Qāhira: al-Hay’a al-‘Āmma li-Shu’ūn al-Maṭābi‘ al-Amīrīya.

Taymūr, Maḥmūd. 1956. *Mushkilāt al-Lugha al-‘Arabīya*. al-Qāhira: al-Maṭba‘a al-Namūdhajīya.

‘Umar, Aḥmad Mukhtār and Nadīm Mar‘ashlī eds. 1999. *al-Mu‘jam al-‘Arabī al-Asāsī*. Tūnis: al-Munaẓẓama al-‘Arabīya li-al-Tarbiya wa al-Thaqāfa wa al-‘Ulūm.

al-‘Uṣaymī, Khālid ibn Su‘ūd ibn Fāris. 2002. *al-Qarārāt al-Naḥwīya wa al-Taṣrīfīya li-Majma‘ al-Lugha al-‘Arabīya bi-al-Qāhira*. al-Riyāḍ: al-Dār al-Tadmurīya.

Zahrān, al-Badrāwī. 1983. *Rifā‘a al-Ṭaḥāwī wa Waqfa ma‘a al-Dirāsāt al-Lughawīya al-Ḥadītha: Ma‘a Taḥqīq Naṣṣ Kitābi-hi al-Tuḥfa al-Maktabīya*. al-Qāhira: Dār al-Ma‘ārif.

al-Zajjājī, Abū al-Qāsim. 1996. *al-Īḍāḥ fī ‘Ilal al-Naḥw*. ed. by Māzin al-Mubārak. 6th. ed., Bayrūt: Dār al-Nafā’is.

Zaydān, Jurjī. 1957. *Tārīkh Ādāb al-Lugha al-‘Arabīya*. ed. by Shawqī Ḍayf. vol.3, 4. al-Qāhira: Dār al-Hilāl.

al-Zayn, Mājida. 1989. “ALECSO : al-Mu’ssasa wa al-Dawr wa al-Taḥaddīyāt,” *Majalla al-Fikr al-‘Arabī*, Bayrūt : Ma‘had al-Inmā’ al-‘Arabī, 56, pp.194-212.

al-Zayyāt, Aḥmad Ḥasan. 1960. “Ra’y fī Qawli-him Sāfara Muḥammad ‘Aliy Ḥasan,” *Majalla Majma‘ al-Lugha al-‘Arabīya*, al-Qāhira: Maṭba‘a al-Taḥrīr, 12, pp.61-69.

al-Zubaydī, Abū Bakr Muḥammad. 1984. *Ṭabaqāt al-Naḥwīyīn wa al-Lughawīyīn*. ed. by Muḥammad Abū al-Faḍl Ibrāhīm. 2nd. ed., al-Qāhira: Dār al-Ma‘ārif.

【資料１】[55] アラビア語圏の憲法における公用語・国語[56] に関する規定

国名 （独立・国家樹立年）	参照した憲法の制定年	アラビア語に関する規定箇所	憲法改正にともなう追加・変更	アラブ連盟加盟の有無・加盟年
アルジェリア（1962）	1996 年	アラビア語が国語であり公用語である（第１章第３条）	2002 年改正 タマズィグト語（ベルベル語）もまた国語である	1962 年
バハレーン（1971）	2002 年	公用語はアラビア語である（第１章第２条）		1971 年
チャド（1960）	1996 年	公用語はフランス語とアラビア語である（第１章第９条）		×
コモロ（1975）	1996 年	公用語はコモロ語であり、国語はフランス語とアラビア語である（第１章第２条）		1993 年
ジブチ（1977）	1992 年	国の公用語はアラビア語とフランス語である（第１章第１条）		1977 年
エジプト（1936）	1923 年 1971 年	アラビア語は国の公用語である（第６章第 149 条）アラビア語は国の公用語である（第１章第２条）	1980 年一部改正と補足（言語の規定に関する変更点なし）	1945 年
エリトリア（1993）	1997 年	公用語に関する規定なし。政府は使用言語（working languages）として別途アラビア語とティグリニャ語を指定［Mūshī 2005:168］		×
イラク（1932）	1925 年	特別法による規定を除き、アラビア語が公用語である（第１章第 17 条）	1970 年改正 アラビア語とクルド語の２言語がイラクの公用語である。イラク人は自らの子を教育法に基づき、公教育機関でクルド語、シリア語、アルメニア語などの母語により、また私的教育機関ではその他の言語によって教育する権利を保障される（第１条第４条） 1990 年暫定憲法 アラビア語が公用語である。クルド地区においてはアラビア語に加えてクルド語も公用語である（第１章第７条）	1945 年
ヨルダン（1946）	1952 年	アラビア語が国の公用語である（第１章第２条）		1945 年
クウェート（1961）	1962 年	国の公用語はアラビア語である（第１章第３条）		1961 年
レバノン（1941）	1926 年	アラビア語が国の全ての管轄区における国語公用語であり、フランス語もまた公用語であり、その使用に関しては特別法が定めるところによる。（第１章第 11 条）	1943 年改正 アラビア語が国語公用語[57] である。フランス語はその使用が限定的に法律によって定められる（第１章第 11 条） 1990 年改正（言語の規定に関する変更点なし）	1945 年
リビア（1951）	1969 年	国の公用語はアラビア語である（第１章第２条）		1953 年
モーリタニア（1960）	1991 年	国語はアラビア語、フルベ語、ソニンケ語、ウォロフ語であり、公用語はアラビア語である（第１章第６条）		1973 年
モロッコ王国（1956）	1996 年	王国の公用語はアラビア語である（前文）		1958 年

国名 （独立・国家樹立年）	参照した憲法の制定年	アラビア語に関する規定箇所	憲法改正にともなう追加・変更	アラブ連盟加盟の有無・加盟年
オマーン（1951）	1996 年 （基本法）	国の公用語はアラビア語である（第１章第３条）		1971 年
パレスチナ	1968 年 （パレスチナ国民憲章）	公用語、国語に関する条文なし。		1976 年
カタル（1971）	1972 年	国の公用語はアラビア語である（第１章第１条）		1971 年
サウディアラビア（1932）	1992 年 （統治基本法）	王国の憲法はクルアーンとスンナであり、王国の言語はアラビア語である（第 69 条）		1945 年
ソマリア（1960）	1979 年	ソマリ語はソマリア人が相互理解において使用される言語である。アラビア語はソマリア人とアラブ・ウンマを繋ぐ言語であり、ソマリア人はその一部として必須の存在である。この２言語をソマリア民主共和国における公用語と定める。（第１章第３条）		1973 年
スーダン（1956）	1998 年	アラビア語がスーダン共和国における公用語である。国家は他の地域言語（lughāt maḥallīya）、国際言語（lughāt ʻālamīya）の発展を何ら妨げない（第１章第３条）	2005 年改正 スーダンの全ての現地語が国語であり、発展、促進され、尊厳されなければならない（第１章第８条第１項） アラビア語がスーダンにおいて広域で話される公用語である（第２項）国家レベルの主要言語としてのアラビア語と英語は高等教育ならびに国家政府の公式使用言語とされる（第３項）…	1956 年
シリア（1941）	1950 年	アラビア語は公用語である（第１章第４条）	1973 年（言語の規定に関する変更点なし）	1945 年
チュニジア（1956）	1959 年	アラビア語が国の言語である（第１章第１条）		1958 年
アラブ首長国連邦（1971）	1971 年	首長国の公用語はアラビア語である（第１章第７条）		1971 年
イエメン（1990）	1959 年 （アデン憲法）	アラビア語が国の公用語である（第１章第２条）	1994 年（言語の規定に関する変更点なし）	1945 年

55）［Flanz ed. 1971］［小杉 1994: 230-31］［日本国際問題研究所編 2001］をもとに作成。
56）公用語（英 official language; ア lugha rasmīya）、国語（英 national language; ア lugha waṭanīya）で訳し分けた。
57）al-lugha al-waṭanīya al-rasmīya.